

高知カツオ県民会議 第1回シンポジウム

2017年4月10日(月) 15:00~17:30

高知県立県民文化ホール(グリーンホール)

○司会

本日は「高知カツオ県民会議 第1回シンポジウム」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

簡単に本日のスケジュールを紹介させていただきます。この後、ご挨拶などに続きまして、高知カツオ県民会議について説明をさせていただきます。続きまして、基調講演「カツオと高知人」をテーマにお話しいただきます。講演終了後、休憩を挟みまして、後半のパネル討論「高知カツオ県民会議の活動について」、討論をしていただきます。閉会予定は、午後5時30分となっております。どうぞ最後までお付き合いください。

司会進行は、RKC高知放送の井津葉子が務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

開会挨拶

尾崎正直(高知カツオ県民会議会長・高知県知事)

○司会

それでは、開会に先立ちまして、主催者を代表し、高知カツオ県民会議会長、尾崎正直高知県知事にご挨拶をいただきます。

○尾崎

どうも皆様、本日は、高知カツオ県民会議のシンポジウムにこのようにたくさんおいでをいただきまして、誠にありがとうございます。第1回のこの記念すべき会に皆様とともにこのカツオを守る取り組みに参加できることを私といたしましても、本当に心から誇りに思いますし、また、武者ぶるいをする思いであります。

古来、高知県は、高知の人々はカツオとともに暮らしてまいりました。皆さん、ご案内と思えますけれども、縄文時代の中村のほうの遺跡からは、カツオの骨が出てまいります。さらには、奈良朝、平安朝の時代、朝廷に堅魚(かたうお)という名前でカツオを献上していたという記録が残っております。現代のみならず、昔から高知はカツオとともに暮らしを紡いでまいりました。そして、現代において、高知を代表する食文化とはカツオのたたきをはじめとするカツオを食べる食文化であろうと。

観光振興の面において、過去、大手旅行雑誌のアンケート調査で7年のうち5回、全国1位になったことがあることは、皆さんご案内の通りです。「地元ならではのおいしい食べ物があるところ」という意味において全国1位、これが過去7回のうちの5回、高知県が

全国で1位になったわけであります。「地元ならではのおいしい食べ物」、筆頭格として例示されておりますのが常にカツオのたたきでありました。

高知県にとって観光振興という観点からこのカツオ、どれだけ大事か、言を俟たないということかと思えます。また、日々の食文化において、私たちの日々の暮らしにおいて、このカツオが大事なことは言うまでもありません。そして、高知県の水産業の振興という観点からも、このカツオ資源、これをしっかり守り育てていくということは大事。これも言うまでもないところであります。

しかしながら近年において、カツオの漁獲量はずっと低減傾向をたどってまいりました。水産庁にも訴えていく中において、水産庁のご理解も得て、水産庁もまた国際会議の場でこのカツオ資源の低減傾向について関係各国に訴えています。まき網を中心とした太平洋部における大量捕獲がこの低減の大きな原因ではないのか、そういうことを訴えてきたところであります。しかしながら、関係各国の利害の対立、さらには、科学的データの根拠不足ということもございまして、まだまだ国際的な本格的な漁獲制限等々ということにはつながらないという状況が続いています。

そういう中、近年、特に昨年、一昨年とずっと続いて、本当に漁獲量が徹底的にもう少なくなってしまう。そういう状況に直面することとなってしまいました。こういう状況の中で、こちらにおいでになります竹内様をはじめとして、県民有志の皆さんが高知カツオ県民会議を設立されたわけであります。高知に、そして日本にカツオを取り戻すというのが大きなテーマということになります。

私もこの県民会議は極めて意義深いものだと思われ、お話をいただきましてこの会長を引き受けさせていただくということとなりました。ぜひとも、この高知カツオ県民会議の取り組みを通じて、カツオの大切さを多くの国民の皆さんにさらに知っていただく。さらに言えば、カツオが大事なんだけど、この資源が決定的に不足しているということ、これについての危機感をともに共有をしていただく。そういう取り組みを進めてまいりたいと、そのように思います。

そして、さらにその上に立って、国際交渉に臨む水産庁の皆様をしっかりと後押しもできていけますように、科学的根拠もしっかり集め、さらに言えば、世論として国際交渉を後押しをする。そういう取り組みにもつなげていくことができればなど、そのように思っています。そして、そういうことを通じて関係各国の理解も得て、カツオをしっかりと守り育てて大事に使っていきましょうと、そういうこととなっていきますような、そういう取り組みに大きくつなげていくことができればなど、そのように考えているところです。

ある意味、ねらうところは非常に壮大なものなのであって、簡単にできることではないだろうと思います。簡単にできることではないからこそ、逆に言うと県民世論を結集し、まずこの高知から声を上げていくということが大事なだろうと、そのように思っているところであります。

今日、シンポジウムにおいて二平先生から科学的な見知からのいろんなご教示もいただ

くこととなりますけれども、あわせて、シンポジウムにおいて各分科会において具体的にどういう取り組みを進めていくかということについても皆様にまたお諮りもしていくということになります。ぜひ今日のこの日を機会といたしまして、高知に、そして日本にカツオを取り戻す活動をぜひ大いに活発に進めてまいりたいと、そのように考える次第でございます。

今日、ご参加いただきました皆様とともにこのカツオを県民運動として、そして、国民運動となりますように、最終的には国際社会に届くようになりますように進めてまいりたいと考えている次第でございます。どうぞ皆様、よろしくご協力のほどをお願いを申し上げます。

本日、皆さん、ようこそおいでいただきました。これからが闘いであります。ぜひともに進めさせていただきたいと思っておりますので、よろしくをお願いを申し上げます。皆さん、今後ともどうぞよろしくをお願いを申し上げます。

○司会

高知カツオ県民会議会長、尾崎正直より、ご挨拶を申し上げます。

続きまして、本シンポジウムを共催していただいております日本カツオ学会会長で愛媛大学学長特別補佐でいらっしゃいます、若林良和様にご挨拶を頂戴いたします。よろしく願いいたします。

来賓祝辞

若林良和（日本カツオ学会会長・愛媛大学学長特別補佐）

○若林

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました日本カツオ学会の会長を務めさせていただいております愛媛大学の若林でございます。この県民会議の設立並びにシンポジウムの開催に関しまして一言ご挨拶申し上げたいと思っております。

まずもって組織化され、それからこのように第1回のシンポジウムが開催されますことに関しまして、強く強くエールを送らせていただきたいと思います、こういうふうに思います。

日本カツオ学会は、2011年の1月8日にご当地高知県の黒潮町で、カツオとうまく付き合う、その手立てを考えようということで設立させていただきました。黒潮町、それから鹿児島県の枕崎市、それから沖縄県の宮古島市、そして宮崎県の日南市、そしてまたご当地高知県中土佐町、さらには宮城県気仙沼市、そして高知県の高知市でカツオ学会のフォーラムを開催させていただいております。

これは、地域に根差したカツオ、そのカツオの価値をさまざまな立場から確認し、そして新しいものを創り出していこうということでこの学会の趣旨をつくりまして開催させてまいりました。

実は、このカツオ県民会議の設立の趣旨を拝見したところ、この学会と非常にマッチする、そういうふうに思いました。その部分で今後の取り組み、二人三脚でこの県民会議と学会でさまざまな形で取り組みをさせていただければ幸いかなと、こういうふうに思っております。

内容につきましても私ども拝見させていただきましたら、まずカツオの情報発信をしよう。それから、さらに消費のあり方を考える。さらにカツオの資源、これが最も、私も皆さんの共通の課題であります、その部分。それからカツオの食文化。この4つの分科会で機動的にいろいろと取り組みをされるというふうに伺っております。その部分に関しまして、ぜひこの日本カツオ学会の、ある意味でシンクタンク的な役割も含めて活用いただければ幸いかなというふうに思っております。

とりもなおさず、持続的かつ継続的に、資源論から始まって、消費、さらには文化まで含めてトータルに考えていくということは極めてカツオとうまく付き合う方法の大事なことだろうというふうに思っております。

この4つの分科会の中で食文化に関して、土佐カツオマイスター制度というのを実施しようという案も出ております。ちょっと私事になりますけれども先ほど申し上げました、実は鹿児島県の枕崎市でその検定を既に6年になるんですけれども続けております。継続は力なりという形でさまざまな取り組みを今後、この県民会議と一緒にできればいいかなというふうに思っております。

とりわけ今回は、オール高知でカツオの良さを見出して、さまざまな取り組みをしていくということでございます。ぜひこれを日本全体に、オールジャパンで国際対応していくという形になればいうふうに思います。そして、少しずつかもしれませんが、国際的な論調を徐々に私どもの日本の、さらには高知のカツオ産業、私どもはカツオ漁業及び鰹節製造、さらにはカツオにまつわるさまざまな産業、オールジャパンで、オール産業で取り組みをしていくということが重要なこと、学会活動を通して考えてまいりました。

ぜひ、この県民会議と二人三脚で一緒に取り組んでいきたいというふうに思っています。そういうことで、この県民会議並びにシンポジウム等々、さまざまな取り組みがずっと続くことを期待し、ぜひ国民運動的な取り組みになるようにご期待申し上げたいというふうに思います。二人三脚で一緒に進めさせていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

以上でご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

○司会

若林会長、ありがとうございました。

続きまして、高知カツオ県民会議の設立経緯や背景、そして目的等につきまして、高知カツオ県民会議会長代理・高知大学副学長、受田浩之よりご説明させていただきます。

高知カツオ県民会議について

受田浩之（高知カツオ県民会議会長代理・高知大学副学長）

○受田

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、この高知カツオ県民会議の会長代理を仰せつかりました、高知大学の受田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私のほうからは、このカツオ県民会議が立ち上がりました背景であるとか、県民会議が目指していること、また、その活動に関してご紹介を申し上げたいと思っております。

まず、高知県民とカツオということで、県の水産振興部の皆様が作成をしておりますスライドをお借りしてまいりました。あとで二平先生からは詳細なカツオと高知人のお話がございますので、私のほうからはこの頭出しだけをさせていただきます。

古来からカツオと非常に深い縁があるというところから始まってまいります。

現在のカツオの生産額と消費というのが、もうこれ、県民の皆様にはお馴染みかと思えますけれども、1世帯あたりのカツオ購入量が全国から群を抜いて高いということが一つの特徴でございます。つまりカツオは古来から、また現在に至るまで高知県民がこよなく愛する食材の一つであり、地域の資源であるということがおわかりいただけると思えます。

そのことが先ほど知事からもございましたように、「地元ならではのおいしい食べ物が多かった」県のランキングにおいてトップになるということにつながってまいります。したがって、県の産業振興において、水産振興から観光振興に至るまでかけがえのない資源であるということがおわかりいただけると思えます。

ところが昨年、このカツオ資源に黄信号から赤信号が灯り始めております。特に、沿岸域のカツオに不漁傾向が顕著に見られるようになってまいりました。これは、沿岸域のひき縄によるカツオ水揚げ量を経年的に示したものでございますけれども、ご覧いただいておりますとおわかりのとおり、平成10年ぐらいからでこぼこが見られ始めておりますし、また不漁の年があることがおわかりいただけると思えます。

ところがこの10年に至っては、その傾向がさらに深刻になっており、この中で時々高く見られているこのレベルがこのあたりの低いレベルとほぼ一致しているということで、非常にこのカツオ資源に対して異変が起こっているということがわかってまいりました。

この理由としては、カツオの高知沖に進んでまいります経路というものを踏まえる必要がございます。これものちほど二平先生から詳細がありますけれども、カツオはこの熱帯海域で産卵をし、生まれ、そして、一定の大きさになると北上してくる群れがございます。

われわれ高知県民からすると黒潮に乗ってやってくるものだというのがイメージとしてあるわけですが、現状から言いますと、この熱帯海域で北上してくるルートには、主に3つあるということで、黒潮に乗ってやってくるばかりではないということ。特に重要なのは、この伊豆諸島沿いと伊豆諸島東沖の北上ルート、こういったところがこの主漁

場である常磐・三陸への来遊の源であることがわかってきております。

現在、この熱帯海域にいる大型なカツオ、もしくは、小型のカツオに至るまでが海外を中心としたまき網によって一網打尽されており、そのことが漁獲圧力となって北上に至る日本沿岸のカツオの来遊に大きな影響、負の影響を与えてるのではないかとということが皆さんご存じのとおり示唆されているわけでございます。

こういったカツオの状況に対して、先ほど日本カツオ学会、若林会長からご挨拶をいただきましたように、われわれもこの状況をいち早くしっかりとお伝えすると同時に、この状況を改善できる取り組みを進めていかなければならないと考えまして、平成23年1月8日に、今日もご来場かと思えますけれども、高知県幡多郡黒潮町の大西町長はじめ、皆様にご支援をいただいて、日本カツオ学会を立ち上げました。

このときに一緒に名乗りを上げていただいた太平洋沿岸の地域を南から北まで、ここに日本の地図としてお示しをしております。ここに若林会長がコメントをされた設立総会でのフレーズとして、「地域で抱える問題や成功事例の情報交換を大切しながらカツオの実態調査など、客観的なそのデータを基にこのカツオの資源、あるいは価値、そういうものを日本中に伝えていこう」ということを目的に、既に6年にわたって、このカツオ学会を継続をして活動してるところでございます。

この23年の1月にカツオ学会を設立した際には、水産経済新聞やみなと新聞、また、地元の高知新聞でも非常に大きくこういうふうに取り上げていただきました。資源調査や研究、文化継承を視野に、情報交換や調査研究の場にこの学会を目的として設立をしたんだと。そして、末永く付き合う方法論に関して、われわれは議論していこうということを訴えてまいりました。

このときには、賑々しく、また大きな注目を集めてまいりましたが、世の中というのは継続的に、かつしっかりとわれわれが情報を伝え発信をしていかなければ、なかなかその取り組みを取り上げてくださりません。われわれ、今日、高知カツオ県民会議を立ち上げ、そして、高知に、また日本にカツオを取り戻す本格的な活動を進めてまいりますけれども、不断にこの活動を前進させることがこういったメディアの皆様に取り上げていただく、一つ重要なポイントではないかなと実感をしているところでございます。

カツオフォーラムという形で11年には枕崎、さらに宮古島、さらには日南市、そして池田町長の中土佐町、さらには、去年は気仙沼でも開催をしてまいりました。カツオの資源に関してもわれわれ、警鐘を鳴らしつつ、どうあるべきかということに関しては議論を深めてまいったわけですが、この取り組みを継続している中で厳しいご意見をたくさん頂戴しています。

具体的に言いますと、「毎年毎年こうやって資源の話をしているばかりで、なんらカツオの資源に対して変化はない。というよりも、もっと深刻になっているということはどう受け止めるのか」という漁業従事者の深刻な声がわれわれに伝わってまいりました。さらには、「助けてくれ」という、これは、叫びというふうに言ったほうがいいかと思えますけれ

ども、その深刻さというのがひしひしと私たちにも浴びせられてくるということでございます。

昨年7月16日には、高知市でこのカツオセミナーとフォーラムの合同の会を開催いたしました。水産庁からは神谷課長にもその資源調査の現状、問題、ありとあらゆる視点でお話をいただきましたが、やはりこの状況を変えていくためには、もっと声を上げていかなければいけないということで、司の竹内太一社長から「今こそ高知県からカツオを取り戻す運動を立ち上げるときだ」という提言を頂戴したわけでございます。

これを受けまして、そのふた月ぐらいからわれわれ有志でどうやったらこのうねりを起こしていけるのか議論してまいりました。そして、毎月1回ないし2回、発足に至る立ち上げのメンバーが集まりまして、カツオ県民会議を立ち上げようということで準備を進めてまいりました。

カツオ保護へ高知県民が声を上げる県民会議であり、知事からもございましたように、この県民会議を国民会議へと発展をさせていき、国際交渉力をわれわれが上げていく、強めていくんだという、そういう教示でございます。2月に一度、記者会見をさせていただき、2月9日にカツオ県民会議を設立した次第でございます。

この目的は、先ほどからありますように、高知に、そして日本にカツオを取り戻すという目標でございます。高知県の県魚であり、地域を代表する食材であるカツオを地域の誇りとして将来にわたり維持していけるよう、高知に、日本にカツオを取り戻す目的で県民会議を立ち上げるというふうにさせていただきました。

そして、カツオ県民会議としては2月9日の拡大準備委員会、第1回目のカツオ県民会議において、委員92名で構成、スタートをさせていただいております。知事を会長にし、副会長5名体制。そして、事務局長、幹事がそれぞれ指名を2月9日にされました。そして、幹事会として、幹事長以下、今日お手元にお配りしております資料の中に幹事のお名前をご覧いただけるかと思っております。その幹事がそれぞれ分科会の分科会座長、もしくは副座長として実質的なこのシンポジウムとともに分科会の活動を進めてまいります。

分科会としては、情報発信分科会、消費・漁業分科会、資源調査・保全分科会に加えて、食文化分科会という構成になっております。われわれとしては、委員をお務めいただいている皆様に、ほぼ月1で開催をされると思っておりますけれども、この分科会でメンバーとして実質的な活動をしていただこうと考えております。そして、それぞれの分科会が目指す目標、あるいは行動計画については、のちほどパネルディスカッションにおいて座長よりご披露していただくことにしておりますけれども、今日、会場の皆様にもぜひご意見を賜り、さらには、委員をお務めいただきながら、この分科会の活動にも実質的にご貢献いただければ幸いに存じます。

委員としては、今92名ということでスタートをしておりますが、今後、委員のご紹介をいただくことによって、活動をご希望の皆様にもぜひ門戸を拓げ、実質的な県民会議としてオール高知でこの取り組みを進めてまいりたいと考えている次第です。

そして、その分科会の活動を含めて、すべての県民会議を情報として共有すべく、最低年に2回、このシンポジウムを開催し、県民の皆様が開かれたカツオ県民会議として活動を進めてまいりたいと考えておりますので、今日、キックオフの第一歩としてご来場の皆様にお力添え賜りますよう、心からお願いを申し上げます、まずは冒頭のカツオ県民会議のご紹介とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会

受田会長代理より、高知カツオ県民会議について説明させていただきました。

さて、これより「基調講演」に移らせていただきます。本日の基調講演は、茨城大学人文学部客員研究員・カツオの資源生態、そして、文化誌の研究者でいらっしゃいます二平様より「カツオと高知人」と題しましてご講演をいただきます。

二平客員研究員のプロフィールにつきましては、お手元の資料の中、プログラムのところに詳細、詳しくございますのでご参照いただければと思います。

それでは準備が整いましたら二平様、よろしくお願いいたします。

基調講演「カツオと高知人」

二平章（茨城大学人文学部客員研究員・カツオの資源生態・文化誌研究者）

○二平

皆さん、こんにちは。茨城から来ました二平と申します。県民会議設立の話は、新聞を見て知ってたんですけど、まさか私が呼んでいただけるとは思ってもみなかったので、大変光栄に思っています。今日、いただいた時間が40分ということですので、少し欲張った中身になっているかと思うんですが、ちょっと急ぐような形でお話をさせていただきたいと思います。

【スライド1】まだ内容が決まらないときに付けたタイトルがこういうタイトルなので、必ずしもこれに合うような中身になってるかどうかはまた別ですけども、いろいろと少し勉強していただければなと思っています。

【スライド2】今日の話ですけども、2部構成になって、最初は、江戸時代から土佐のカツオは日本一なんだよと。知っておられる方もおられると思いますけども、そういう話を少し紹介をしたい。それから2番目が、先ほどからお話があったように、カツオがいろいろ大変な状況になっているという。これについては、ずっと僕も言い続けてきているんですが、その中身について少しご説明をしたいと思います。

【スライド3】1部のほうですね。

【スライド4】これが日本近海へ北上してくるカツオの大体ルート、東沖のほうはともかくとして、日本近海には大体このぐらいの4つのルートで上がってくると。よく見ているといわゆる浅いところの瀬って言うんですかね。海嶺というだけ、そういうようなと

ころに沿って基本的には上がってくるようです。土佐はここですからね。こういうルートで来ると。

【スライド5】これは、縄文時代の遺跡から出てくるカツオです。これは、岩手県の縄文遺跡から出たんですけど、6センチぐらいのぶつ切りになった骨が出てます。どういうふうにして食べたのかというのはよくわかりませんが、縄文の遺跡からはたくさんこういうカツオの骨が出ます。丸木船ぐらいしかなかった時代に縄文人は漕いで行って、そして、カツオを釣ってそれを何らかの形で食べてたというふうな形。

【スライド6】それから先ほどもちょっとお話がありましたけども、飛鳥時代、それから奈良時代に木簡という木の札が出てきて、税金としてこういうものが納められましたよという、そういう証拠のことが。ここにちょっと見づらいたんですけども、「生堅魚」……、カツオのことを言います。「生堅魚」。平城宮からは「堅魚」と、こういう形で出てきますので、この時代にもいわゆるカツオが献上されてたということがわかります。

【スライド7】これは、有名な『延喜式』という書物に載っている、カツオを京のほうに納めていた地域の図なんですね。土佐はもちろんここにありますが、ここからも京のほうのこちらのほうに納められてた。こういう時代からカツオは貢ぎ物として京の都に運ばれていたということがわかってます。

【スライド8】日本には、記録としては鰹節というのが昔、大変盛んにつくられたんですが、鰹節という言葉が出てきた、記録に残っているというのが、1513年、室町の時代に初めて、「種ヶ島家譜」という、こういう文書へ出てくるんです。「かつほぶし」と書く。それで、臥蛇島というところから領主のお殿様の種ヶ島氏への貢ぎ物として献上された。「かつほぶし五れん」と書いてあります。「五連」というのは、こういうふうに縛って、これが1連ですね。これを5つ、お殿様に献上したということが書いてある。これが初めて日本で「かつほぶし」というのが言葉として出てくる。その初めです。

【スライド9】その島（臥蛇島）、どこなの？という、ここです。種子島、屋久島、奄美大島は皆さんよく知っていると思うんですが、こここのところに小さな島。今は、無人島だそうです。面積4平方キロ、小さな島です。戦前まではカツオ漁が盛んだったそうです。ここで捕ったカツオを鰹節にして、種子島のお殿様へ献上したと。ここが初めての記録です。ちょうど黒潮はここら辺を通りますからカツオは今も釣れるところですね。

【スライド10】土佐における鰹節の登場。じゃあ、高知県、土佐で初めて鰹節が登場するのはいつなの？よくわからなかったのですが、室町時代の末期ごろではないかと思われまます。ここに、この間、私もちょっとある方から教えていただいたんですが、記録があるよということで。1597年、安土桃山の時代です。関ヶ原の戦いよりももっと前ですからね。徳川さんの前です。そこに足摺の松尾浦の庄屋さんが、京都の長宗我部元親に鰹節百本贈ると。こういう記録が土佐清水のほうの記録に載ってました。私も最初気がつかないんですけど、これ、教えていただきました。これが最も古い記録だと思います。

そうすると種子島のお殿様のところに伝わって、この間に何らかの形でこちらにも伝わ

ってきていたのかな。まあ、どんな鰹節かは別として、こういう時代があります。

【スライド 11】それで、そのあと、よく歴史に出てくるんですが、高知、土佐は紀州の漁民が入ってきて、そして、紀州の漁民の方々が鰹節の技術を土佐に伝えて、それが土佐の節を有名なものにしていった。その背景には紀州の漁民がいるということは、これは有名な話なんです。

なぜ紀州の人たちが来たのかというと、この時代に秀吉が紀州を攻めるんです。そのときに、水軍をしていた方々がもう侍をやめて、こういう漁業とか回船業に回る。そして、その船の技術で、紀州、特に印南の鰹船が有名なんです、五島列島の奈良尾に行ったり、それから日向灘でカツオ操業する。こういう歴史を持っています。

この時代ですね。関ヶ原の戦いがこの後です。その前の段階でどんどん出てくるんです。

【スライド 12】こういう船が、特に、印南、これ、和歌山、紀州です。ここは潮岬。ここ、印南という、ここが鰹節発祥の地というふうになっていて、行くと大きな看板が出てます。鰹節の歴史上では、有名な3名の方が全部ここから出るんです。1人は土佐に鰹節の技術を伝えたと言われる甚太郎。聞いたことありますか。甚太郎。土佐にとってみれば恩人の一人だと思います。もう1人は、千葉県とか、伊豆のほうに、ここの掟を破って伝えた与一。土佐の与一という名前になっていますが、ここの人なので、こちらの人は印南与一と言ってます。与一さん。もう1人は枕崎に伝えた人がいます。これが森弥兵衛。全部この人が全国に技術を伝えて鰹節産業を隆盛に持っていくという。本当にこの町から出てるんです。だからここは本当に鰹節を誕生させた町ということで、この3人を偉大な人ということで、この間、石碑が建ちました。こういう町です。

ここはやはり木を持っているので、紀州は木、木材。木材がないと船は造れませんので、大体漁業が盛んなところは木材産地です。こちらも多分そうだと思います。宮崎もそうです。いわゆる木材を山から川を通して切り出した、その木で船を建造して、そして出ていくと。水軍を持っていたところも全部そうです。

で、こういう立派な船。特に、印南の方々の場合は、小さな船じゃなくて大きな船を造って、大人数乗り込んで行って、五島列島のほうまで行ったりしたという、そこに特徴があります。こういう技術を持っているわけです。今のカツオ一本釣りの原形です。基本はまったく変わりません。これが江戸時代の初期に出てくる。

【スライド 13】それで関ヶ原の戦いがあります。これ（この写真）はNHKのこの間までやってた、これは土佐の殿様のほうから言えば敵方になりますけども。大坂冬の陣、夏の陣、このときに土佐の2代藩主の山内忠義さんですか、この方が家康さんに鰹節をお祝いとして、2,000本贈ったという、これも記録に残っているそうです。2,000本、それなりの量ですよ。これはどうも宇佐でつくったというふうに言われています。記録としてこれはきちっと残っています。ですから、2,000本贈るということは、もうこの当時、かなり鰹節の生産が盛んだった。鰹節の生産が盛んということは、生のカツオを釣ってこないと生産できませんから、カツオ釣り漁業はかなり活発に行われていたということです。

【スライド 14】それで、先ほど言った甚太郎。土佐の恩人なのですが、甚太郎さん、初代と二代とあるんですが、甚太郎さんは清水の「越」というところへ漂着をしたというふうにされていますけれども。この方が……。行ったことありますか。臼ばえという、足摺のところに岩が非常に……。ここのところの神社があるんですが、そこに行くとカツオ船の奥さん方は旦那さんの安全を祈るといって、そういうところで、僕も行ってきましたけど、何回か。ここの沖にカツオ漁場を発見するんです、素晴らしい（漁場を）。昔は発見した人が権利を持つということになっているので、それでこれを発見を……。おそらく漂着したというのは、適当な理由で、そこでカツオ漁をやりたいということで入ったんだと思います。

そのあと、この松尾を中心とした6つの浦を土佐藩からOKをもらって、ここに住み着くわけです。10カ月住み着いて、2カ月紀州に帰ると、こういう生活をするんです。そして鯉節製造をして大坂のほうへ運んで、もちろん土佐藩にも税金は納めます。紀州の藩にも税金を納めますという、こういう商売をやりました。

このときに一番古い印南の漁民の方の位牌が松尾にあります。その年代がこの年代ですから、この年代の間におそらく初代の甚太郎さんは来ただろうと思われれます。この甚太郎さんが地元の清水の女性と結ばれてできた子どもが二代目甚太郎。その人は土佐の人になりますので、土佐に居着いたというふうに言われてますけども、よくわからないんですけどね、そういうことになっています。

【スライド 15】それで、もう1600年代に入った後半には、もう甚太郎がつくった、清水ですから清水節の評価が宇佐の鯉節の評価を上回る。そういうふうになります。これは記録としてきちっと載ってるんですが、1673年に清水で大火があって、その復興のために紀州の「釣溜船」と言っって先ほどの立派な船、十数隻を呼び寄せるといってをやり、地域振興のためにね。そういうことがあつたり。

これはちょっと字が間違ってるんですが、これは鯉節のことです。このときは、下土佐を最上……。下土佐というのは清水のほうでしょう。それで、上土佐を次とする。もうこのときに清水のほうはこちらのほうの鯉節よりも上位になったと。品質がいい鯉節を生産をする。だからそれは、紀州の人たちが入って技術を持って、そこで生産をした。そういうようなことでたくさんつくり出す。商品経済の中において、ここに、その浦々に商人が出てくると。こういうような時代に入ってきます。

【スライド 16】それで、豪商の袋屋さんというのが中浜……。中浜というのはジョン万次郎の生まれた地区ですよ。そこに1600年代の後半になると出てくるんです。酒造りから始まるようです。有名な方で、袋屋さん。

井原西鶴が書き物をしてるんです。「土佐国の幡多に助八……」、こういう名前だったかどうかは別にして、たとえ話で言ってるのかもしれないけども、「海の世界を我がものにし、次第に金持ちに」なつたと。だから非常な豪商に育っていったと。カツオでお金儲けがあつたと。

そして、そういう時代、鯉節の流通がどんどん盛んになって、江戸に問屋さん、大坂に問屋さんが出てくる。そしてどんどん、どんどん土佐から鯉節が大坂、江戸に運ばれる。江戸や大坂には問屋さんが出てきて、どんどん、どんどん鯉節を。だから、どんどん、どんどん売れた時代ですね。

【スライド 17】足摺で最も古いお墓は、やっぱり松尾にあって、1700 年なんです。これ、八百蔵という方のお墓らしいですけども、元禄の時代ですね。いっぱいお墓が出てきます、松尾に。「紀州〇〇」「紀州印南の〇〇」というお墓がいっぱい出てきます。だから、そこに来た紀州の漁民が足摺で命を落として、そして死んだ場合、そこに葬られてお墓をつくるということになります。昔は移住は認められませんので、あくまでも紀州で生まれた人は紀州の人です。ちょうど赤穂浪士の討ち入りのころですね。こういう形でお墓がいっぱい足摺には残っています。

【スライド 18】それでこういう有名な文書（「和漢三才図会」）の中にも土佐節が一番という評価が出てくるんです。「土佐の産を上、紀州熊野……」、もともと紀州から来たのにもう紀州熊野を抜いてしまうんです、土佐の節のほうが。だから非常な技術革新があったということですね。そして、この土佐で生まれただろう甚太郎の息子さんがかなりな力を果たして、鯉節製造を担っていくと、こういう方だそうなんです。

【スライド 19】そして、そのあと、中浜には山城屋さんというのが出てきます。この山城屋さんという方も有名な、いわゆる商人さんで、非常なお金持ちになるんですが、初代、二代というふうになっています。この二代目、三代目で非常に立派な節をつくって、「春日節」という。春日丸という船を持っていて、春日節という、こういう節を大坂・江戸に送り込みます。ブランド品ですね、今で言う。

【スライド 20】その時代に、こういう絵が出て……。有名な本なんですけど、絵があって、これに「土佐、薩摩を名産として……」、もう本当に土佐ですよ、トップに出てくる。ねえ。肉が厚くて、鯉節にしてもいい商品、生で食べても美味しいよと、こういうふうに書いています。

【スライド 21】山城屋さんというのは、足摺の金剛福寺ですか。あそこへ行くと、こういう大きな塔が建っていますけど、それを寄進してるんです。お金がいっぱいあそこのお寺に寄進すると。大型廻船を 3 隻、小型廻船を 3 隻、鯉船 5 隻、伊佐とか松尾に鯉船として預けて操業をやらせるのが 17 隻。すごい船主さん、そして商人さんになっていく。こういう歴史を持っています。

【スライド 22】これは、これもまた有名なんですよ、鯉節の世界の中では。1822 年……、1800 年代に入ると番附表が出てくる。ここに、いいですか。皆さん。茨城から来ました。私は、横綱稀勢の里と同じところですけど。茨城は稀勢の里で湧いてますけども、ここに横綱はないんですね、番附には。大関、ここに土州と書いてある。土佐、清水節と書いてある。ねえ。その次、宇佐節と書いてある。こんなに地域にいっぱい節があって。茨城県にも節があるんですが、茨城県、ここら辺です。圧倒的に土佐です。ねえ。これだけ節が

つくられていると。そして、商品として大坂、江戸に運ばれたということです。非常に盛んだった。これだけカツオがいっぱい釣ってたということですよ。何十万本という、何百万本かな。そのぐらいどんどんつくって出してたと。こういうふうになります。

【スライド 23】 もう一つ、これはあんまり鰹節の世界の中では紹介されていなかったんです。私見つけたんですが、「諸国産物大数望」という、こういうやっぱり 1840 年ぐらい。これに、ここにあるんです。特出しですよ。特出し。これは鰹節ばかりじゃないですよ。白米とか、いろいろ書いてある。鯨とか書いてあるでしょう。ここに横に特出しで「前頭土佐鰹節」と書いてあるんです。だからやっぱりいかに有名だったか、土佐の節は。ちなみにウナギは瀬田、京都ですね。日向は大ウナギだそうです。茨城はあんこうです、やっぱり。これは載ってくるんです。だけど、すごいじゃないですか。土佐は上のほう、特出しで鰹節。いかに鰹節、カツオは土佐かということがわかると思います。

【スライド 24】 これは、安藤広重の（「土佐海上松魚釣」図）、これは足摺の岬の前で釣ってる絵ですね。それぐらい有名だったんですね。

【スライド 25】 これは高知で一番古い絵馬です。これ、黒潮町の上川口の天満宮。私も案内されてその天満宮にあるときに見に行ったんですけど、「えっ、こんなところに置いていいの？」と思いました、そのときはね。そのあとはなんかちゃんと保存されたようですけど。やっぱりこの時代なんです。この時代にいっぱい記録が残っています。いかに盛んだったか、釣りと鰹節づくり。

【スライド 26】 こんなに四国山地に鰹節が。やっぱりここが高知人のカツオ好きの原点だと思うんです。

【スライド 27】 これは先ほど言ったランキングです。高知、圧倒的。茨城も結構食べるんですよ。茨城はマグロよりはカツオです。だけど高知さんにはとてもとてもかないません。伊勢神宮の神様も毎食事、2回摂りますけどもカツオなくしては神様はいられないという。だから私ちょっと半分冗談で「高知人も神様みたいなものだ」と書いたことがありましたけど、そうです。指定な食品なんです、カツオ。神様のお食事では、そんな指定な品目はレシピにはないんですけども、ちゃんと伊勢神宮ではカツオになっています、堅魚（かたうお）。このぐらいにね、これはやっぱりただ食べるということじゃなくて、薬効、薬の効果がおそらくカツオにあったから珍重されてたんじゃないかなと思います。

【スライド 28】 そんな話をやっていくと、今時間なくなっちゃう。それから後半がこの話になります。カツオに今、何が起きているか。これのほうが私のもともとの専門なんです。

【スライド 29】 人工衛星の写真で水温を撮ると……。これ、熱帯です。ここがパプアニューギニアとか、インドネシアとか、台湾。ここに黒く見えるのが、これが温水です。水温が高いんです、こっちが。ここに温水のプールがあるんです。ここら辺が一番水温が高い。

【スライド 30】 見てください。これがカツオの幼稚魚、赤ん坊の分布です。重なってく

るじゃないですか。カツオの赤ん坊というのは、この温水プールで生まれて育つんです。だからこの熱帯域で基本的には生まれて育って、そして、その一部が日本に泳いでくる。こういう生態を持っています。

【スライド 31】それで、熱帯ところだけで回遊しているグループもありますけれども、そこから離れてエサの多い北の海へイワシを食べに来る、こういうカツオもあります。みんながみんな日本へ来るわけではないんですね。

【スライド 32】先ほど言ったようなこういうような形で北上してきます。特に黒潮に乗るっていうんじゃないんですけど、黒潮のその縁の辺りからずっと入ってきて、日本近海へ近づくようなカツオが昔からの、黒潮から来るみたいな形で考えて。ほかには、先ほどもあったんですけど、ルートがあります。だけど四国のほうへ来るカツオというのは、基本的にはこの黒潮のほうから入ってくるカツオと、この紀州沖に、ここら辺から上がってくるのが大部分だと思います。

【スライド 33】カツオ漁業には、ひき縄漁業、一本釣り漁業、まき網漁業というのがあって、もう皆さんご存じだと思います。

【スライド 34】私は40年間カツオを見続けてきました。茨城県的那珂湊港に今はあんまり入りませんよ。ほとんど入りませんが、土佐の一本釣りの船がいっぱい入ってきた時代があったんです、昭和50年代。カツオを釣ったら土曜日は那珂湊という、そういうふうに言われていたぐらいにカツオが入ってきて。カツオ好きですからね、茨城県人は。だから行商さんが買い求めて、すごいカツオ、何隻も港で順番待ちをしてる。

そのときに、僕はたまたまカツオの調査に入ったので、土佐の船頭さんたちと知り合いになって、船頭たちの話を聞くのが楽しくて、毎日朝5時に行きました、市場に。そしてカツオを量って、飽きもせずやりました。それから40年。よくなんかの言葉、ありますね。(笑) それから40年です。

【スライド 35】何が変化があったというのをちょっとだけ皆さんにお話しします。これ、20年前に私が三重県でした話がマイナーな新聞に載ったやつなんですけど、そのときに私は、「カツオ資源が黄信号ですよ」と言いました。カツオに資源の問題なんてあるの？というようなことで、まったく信じていただけませんでした。カツオなんか潤沢でいくら捕らって減りもしないというのが当時の考えで。私は、那珂湊でともかく量りに量って、いろんな形で見えたので、変化がやっぱり起こってるって。それは生態学とか、回遊学とか、そういう方向から数字の変動じゃなくて、魚の太り具合だとか、そういうようなほうから見てたので、これは少し黄色信号が灯りだしていますよということを言いました。20年前になります。

【スライド 36】亜熱帯反流からの北上量が減っている。ちょっといろいろなデータを見てください。

【スライド 37】これは南のほうから暖かい潮が来ますから、この20℃から23℃のところまでの距離を測って、暖かい水が北に出てるか出てないかをちょっと数字化するわけです。

【スライド 38】ここを測って、a、b、c、足し算すると、暖かい水が北へ来ればこの値は大きくなりますよね。

【スライド 39】それで、その値と日本近海のカツオの量を並べてみると、こういう関係があって、やっぱり暖かい水が北へつけてたほうがカツオは日本近海に近づいて来やすいんですね。こういう傾向がある。昔、こういうような関係だったんです。だから水温上昇が大きければ割と量がかかってくる。ところが近年は、水温が高くなろうと全然影響しないと、こういうデータになってくるんです。なぜかという、水温が高くても来遊量は少ないんです。ですから、資源のほうはもう小さくなっちゃってるから、水温があつたって来るべきカツオがいなくなっちゃってる。そういうことをこれは表してるんじゃないかなというふうに私は見えています。

【スライド 40】それから西側のほうからの黒潮ルート、一番西、フィリピン、台湾、沖縄、あっちのほうから来るカツオ、特にこれが減っています。随分前に、あの三重で話をするとき、これを基に私は話をしました。

【スライド 41】どういうことかという、標識漂流を僕らも調査船でやりました。黒潮ですよ、これは。黒潮の源流の辺りで2月に、ちょうど1キロから1.5、1.6キロのカツオにこういう標識を打ったわけです。そのあと、どこで捕れるか。捕れたところで見つけてくれたのが3月から6月になってくると、この四国沖で捕れてくるんです。普通に考えていて、ここから上がってきますよね。時間を追うごとに東北のほうまで行くんですが、これはまったく普通に当たり前のことのようにあの当時考えられていました。ですから当たり前のように、ここからどんどん、どんどん北へ上がってきたんです。

【スライド 42】それでここを黒潮の源流域で、この範囲の漁獲量と、それから、もっと東沖のマリアナ海域をどんなふうな変化になってきたかというのをちょっと見てください。特にここがどうなってきたかを見てください。いいですか。

【スライド 43】黒潮の源流域、こっちが昔は捕ってたんです。こちらへ行く必要なかったんです。こちらで捕れた。けどもう90年代以降、こちらに行っても魚がないので、土佐の船なんかみんなマリアナのほうへ、東のほうへ出てしまいました。いけばこっちのほうは島伝いに下がっていけばいいんですけども。こういうふうな捕り方。だから黒潮の源流域は魚が見えなくなっちゃったということ。

【スライド 44】黒潮源流ではこんなになって、もう80年代から減り始めて、最近はおそこへ行く船はないです。奄美の辺りは行きますけどね。

【スライド 45】これはどういうところで漁場ができているか。昔は当たり前のようにこっちのほうに漁場ができてたんです。だけど、2000年代に入ってくるとこっちが本当にスケスケになっちゃって、捕れなくなって、伊豆諸島辺りから入ってくるカツオのほうを中心になって、三陸の漁場になってると。黒潮ルートからの北上量が減っちゃったんで、土佐沖、紀州沖は空っぽになっちゃいました。こういう現象が起きています。

【スライド 46】はい。読めますからいいですよ。

【スライド 47】三陸沖に分布する魚には、0.7 キロから 1.8 キロものとか、2キロから 4キロものというのが、これ、秋に出ます。この秋に出る小さなほうの魚というのは、秋になって下がってくると熱帯まで下げないんです。適当な暖かいところに行くと、ここで越冬して、もう一回日本近海に今ぐらいから近づいてくるんです。色気づいた大人になったカツオ、2キロから4キロものは大人です。ぷっくら太った。そういうカツオはもう親になりますので色気づいて……、まあ、こういうのは研究では使わないんですが、わかりやすい。色気づくともう熱帯のほうへ初めての産卵になって南へ行ってしまう。

この魚（未成年）です。この魚が戻ってくるかどうかということなんですね。

【スライド 48】いいですか。前の年に秋の小さいカツオがたくさんいれば、次の年、もう一回戻ってきますので量が良くなります。こっち漁獲量です。こういう関係が昔だったんです。最近、東北に少し魚の量が出て昔の割合に漁獲量が次の年来ないんです、三陸のほうは。この線がこの線ですから全体的に下に下がってます。

ということは、三陸のところまでは小さいカツオは来てたんだけど、次の年にそれがUターンして戻ってこないということです。どういうことかということ、もう戻らないでそのまま南のほうへ下げてしまった。春先だけちょっと顔を出して、そのまま三陸へ上らないで下がっちゃう。こういうような現象があるということです。

【スライド 49】秋の三陸のカツオです。

【スライド 50】秋漁が低下。これ、見ていただければ。気仙沼は非常に心配してます。また4月の末に気仙沼に呼ばれてるんですが、こんなふうには秋の漁がどんどんどん落ちていきます。秋漁がね。だから土佐の船も戻ってくるのが早くなってますね。そういう現象が起こっています。

【スライド 51】では、いつからこんなことが起こってるのということですね。

【スライド 52】千葉以北は2000年ぐらいからガタガタガタと落ちていきます。

【スライド 53】じゃあ、こちら西側のほう、伊豆、四国近海、四国の沖合。これはちょっと平均値からのズレを表しているんですけど、こういうふうなマイナスのほうに黒い棒が伸びてるというのは、どんどん、どんどん落ちてるとのこと。見てください。1980年代ぐらいから落ちだしてるんです、西は。どんどん、全体的に。これではやっぱり厳しいですよね。なんとか辛うじて千葉以北、三陸のほうで支えられてるとのことです。

【スライド 54】まとめてみると、話もしなかった部分もありますけど、ちょっと言いますと、春の北上暖水……、暖かい水があってもカツオは来ませんというのが最近の傾向。水温があるけども船頭らは、「魚が見えない、見えない」と騒いでいます。西日本は90年代から減ってる。

特に四国沖、ここの沖ですけども、素群と言って野っ原の何もなくて群れが見えなくなった。昔はちょっと船を出せばそこら辺に見えたのが全然見えない。今は黒潮牧場という、ブイのところで魚を釣るしかないというのが現状です。

で、四国沖、紀州沖では、いわゆる土佐の一本釣りの船なんかの漁場はまずほとんどな

なくなっちゃいました。

それから九州南の瀬付、今まだそこら辺で操業やってますけども、そこら辺に出るこのぐらいの大きさの魚が東へ出てきません。そこまでは出てるんだけど。いわゆる四国沖へもっと東へ出てこなくちゃいけない魚が、昔は出てきましたけど、(今は)出てきません。もうそこで足を止めてしまってる現象があります。

【スライド 55】それから房総、三陸。2000年代の半ばから減ってる。房総よりも三陸沖の減少は顕著。北のほうが駄目。春の3キロものカツオはほとんど捕れなくなってきました。私がやったころはいましたけど、(今は)捕れません。

それから案外、春の2キロものカツオ、これが脂ののりが良くなってきました。かえて春のカツオのほううまいじゃないのというふうになってます。こういうカツオになってきました。

銚子沖でUターンする魚が増えています。脂をのせるということは、普通、秋にのせるんですが、脂をのせるということは体ができてくるんですね。そうするともう北へ上る必要はなくなって、夏を迎えるところにUターンします。こういう魚が増えます。

秋、冷たい水の中に入っていきような魚はほとんどいなくなっちゃいました。こういうところに入っていきカツオがトロガツオになるんです。だから最近、トロガツオなんて見ないはずですよ。まず、土佐船も行きません、こういう水温のところ。行ってもいないんです。だからそれは、海のせいとか何とかじゃなくて、カツオ自身がそういう生理的状態になっちゃってるんですね。それから早く南へ下がっちゃう。

【スライド 56】全部、全体資源の減少が要因だと私は考えています。資源が減ってきたんで回遊生態が変化した。どうして？ 資源が減る。早く色気づいちゃうんだよと、カツオが。どんどん子孫を残すために色気づく。そして、回遊に変化を起こす。だから分布域の北である日本近海から魚が減っていくと。日本まで来ないという現象が今起こってきてるということです。

【スライド 57】基本的にはもう私は前から言ってるんですが、20年前からこの影響（熱帯まき網の過剰漁獲にあり）だというふうに考えています。

【スライド 58】これがまき網です。3,000 トン級。日本の船は、大体 1,000 トン級ぐらいですよ。4,000 トンクラスもあるのかな。こういう船が外国の熱帯まき網ではやってます。こういう船がまくわけですよ。

【スライド 59】このぐらいの船の隻数があります。日本は 32 隻ぐらい。積んでいる機械が並大抵ではありません。ものすごい高性能が、ヘリコプターも積んで、ヘリコプターを船の上から飛ばして魚群を探してまきます。カツオもおちおちいられないですよ。こういうことになってる。

船がどんどん増えてきた。制限がかからない。だって資源は潤沢だというのが、WCPFC のずっと一貫した評価ですよ。資源は減ってない。潤沢ですよと評価してるから規制をかける根拠はないわけですよ。私は WCPFC の計算は間違ってると思います。前から言ってるんで

すが、間違ってる。そのうち大きく見直されると思います、過去にさかのぼって。やっぱりちょっと厳しかったなど多分なると思います。

【スライド 60】これが FADs という、集魚装置。こういうものを海に設置して、固定式と流すのとあります。

【スライド 61】これがパプアニューギニアのところに設置されて、こんなに入ってるんです。これをまいていくわけ、どんどん。これにメバチとか、キハダの小さいやつも一緒に捕れるわけです。カツオも小さいの。だからメバチとか、キハダはこれの FADs を規制しなくちゃいけないと。マグロのほうから議論がいつています。カツオの議論じゃないんです。メバチ、キハダの資源を大切にしなくちゃいけないということで議論をいつています。広い海ですからね、どういうふうなやり方をいつているかわからないんです。こういうのが現実なんです。

【スライド 62】それからもう一つ問題は、フィリピン、インドネシア。これ、捕っている魚です。これはちょっと一番典型的な例なのでこういう年ばかりじゃないですけど、ほら、30 センチです。30 センチ以下のそういうような小さな魚をかなり捕る漁業があつて、これの捕ってる尾数が 30 センチはサバですよ、サバの大きさ。これを捕っています。この問題はほとんど WCPFC でも議論になってないですよ。

【スライド 63】それで、これはなかなか日本ではいつづらい話なんです、30 センチのカツオを鰹節にするとこんなに小さくなる、10 センチ。これをだしの会社さんが輸入をしています。粉末にして、だし、めんつゆの材料になります。日本の中にもこういう構造があるわけです。ここはやっぱりちょっと問題だというふうに私はいつています。

【スライド 64】これがカツオの分布です。南のこの熱帯でかなり捕っているということです。

【スライド 65】これがよく出てくる絵ですけども、私が警告を发了したのは 96 年ですから、100 万トンぐらい。この時代に黄色信号ですよと言つたんですが、それから 2 倍に、今は 200 万トンになっています。これでは魚は日本近海で見えなくなつてしまうのは、僕は当たり前だと思つています。右肩上がりです。どんどん伸びています。これは魚の資源が増えてるからじゃなくて、捕る技術、捕る船の数がどんどん大きくなつて、熱帯のところでどんどんまくからこういう数字が出てくる。ほとんどがバンコクに行つて缶詰になつたりしますね。ペットフードにもなります。こういう構造がある。

【スライド 66】それで水産庁さんが示してくれた、これ、神谷さんが来たときに示してくれたかもわからないですけど、特に、この西側のところにあるインドネシア、フィリピン、それからパプアニューギニア辺りの資源、このところを見ると、資源の 8 割を捕つてる漁業になつてるといつことが、去年でしたか、初めて出てきました。やっぱりなと思ついました、私は。だからこういうのが西側にあるから黒潮ルートからの魚は減るのは当たり前だろうといつことですね。

【スライド 67】これは、どういうところで間引いてるかといつことで、ちょっとわかり

づらいかもわからない。ここで小さい魚をいっぱい捕るので、このところの魚を捕ってるといふことでのマイナス要因がもちろんあります。それからもう一つは、熱帯域で2才魚になるまでの間にどんどんまき網でまきますので、3、4才になると、産卵御になって亜熱帯反流域、北赤道より北のこういうところへ大きいカツオが集まってきて、ここで夏、産卵するんです。こっちもかなり減ってるんです。だから0才魚で捕ってるし、1、2才魚で捕ってる。こっちに残ってる尾数はものすごく少ない。だから、ここも減ってる。ここでも圧力。これが最終的に日本近海へ出てくる魚のダメージになってるといふふうに私は見えます。

【スライド 68】これはパプアニューギニアです。まき網でも減少が始まるという。これ、去年だったですか、初めて見させてもらったんですが、まき網の操業日数は緑の線、増えているのに、SKIPJACK、青がカツオですけども、減りだしてるんです、これ。だから、まき網のところでも、やっぱり熱帯でもどうもおかしくなっているというふうにデータとして出てきています。やっぱりそれはそうですね。どんどん、どんどん捕っていけば。

【スライド 69】それで、これは中西部太平洋全体の漁獲量が今、200万トンですけども、日本近海の竿釣の漁獲量と並べてみた図なんですけど、僕がそろそろおかしいと言ったのは、100万トンの時代です。それからどんどん増えています。こっちへ下がってきてます。だから、今は捕りすぎなんじゃないかなとやっぱり思うんですね。だから100万トンへ戻すというのはなかなか大変かもしれないけど、やっぱりこっちのほうへ戻していくことが日本近海の魚を増やすことになるんじゃないか。単純な見方ですけど、そう思っています。

【スライド 70】はい。もうこれはこういうことですね。漁村を支えてきたのは釣りの漁業。特に土佐の船はそうですね、地域にありますから。

【スライド 71】カツオを支えるのは地域全体。もうカツオでこんなにいっぱい産業界が潤ってきたはずですよ。こういうのがカツオにはあるんだよということ。

【スライド 72】それで来遊量を増やすためには、いろんな議論をしなくちゃいけないんですが、やっぱり基本的には漁獲量規制に入ってもらわなくちゃいかんと。特に、小型魚の規制に入っただけのと、3～5才の産卵魚が残るような形にしていきたいというふうに思います。

カツオは回復力をもものすごく持った魚です。いじめられてますけども、一度少しコントロールに入れば増えやすい魚だと思ってます。だから心配はしなくていいと思います。必ず増えてきます。効果はある魚だと。だからそのところを見ておいたほうがいいと思います。

【スライド 73】ここに書いています。こういうふうな形でやっぱり考えていかなきゃ。で、このところは、やっぱり、だし産業の会社さんのほうにもぜひ協力をいただいて、エコな企業として協力をいただけないかなというふうに思っています。日本は小さいカツオは買わないよというふうになってくれれば、少しコントロールが効くのかな。

それからオールジャパンの話が出ていました。やっぱり水産庁さん、数年前から見方が

変わってくれたんで、やっとな変わってくれたんですが、それならみんなで応援して国際会議で頑張るといふうに言ったほうが。

それから民間とか業界からも日本の中だけで情報発信しないで、国際的ないろんな民間団体ありますので、そういうところにもどンドン情報発信して、高知県みたいなエコな漁業をやっているところは困っているんだということを情報発信をぜひしていただければなといふうに思います。

【スライド 74】はい。一応、こういうことで。以上、私の話です。ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。二平章様のご講演でした。もう一度、大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

ではこれより約 10 分の休憩と取らせていただきます。再開の予定時刻は、4 時 20 分とさせていただきます。それまでにお席のほうにお戻りくださいますようお願いいたします。また、敷地内すべて禁煙となっておりますので、ご協力いただけますようお願いいたします。

祝電披露

○司会

この時間をお借りいたしまして本日の「高知カツオ県民会議 第 1 回シンポジウム」に祝電が届いておりますので紹介させていただきます。

お名前のみ紹介させていただきます。

農林水産大臣・衆議院議員の山本有二様よりいただきました。

衆議院議員の中谷元様。

公明党政務調査会長・衆議院議員の石田祝稔様。

自由民主党衆議院議員の福井照様。

参議院議員の高野光二郎様。

参議院議員の中西哲様。

そして、株式会社四国銀行頭取の山元文明様よりご祝電をいただいております。

紹介させていただきました。

それでは、4 時 20 分まで休憩とさせていただきます。

〈休憩〉

○司会

お待たせをいたしました。それでは、プログラムを再開させていただきます。

ただ今より、高知カツオ県民会議の活動について、パネル討論を行ってまいります。ここからの進行は、今回のパネル討論のファシリテーターを務めます、高知大学副学長、受田浩之高知カツオ県民会議会長代理をお願いいたします。受田先生、よろしくをお願いいたします。

パネル討論「高知カツオ県民会議の活動について」

〈ファシリテーター〉

受田浩之（高知カツオ県民会議会長代理・高知大学副学長）

〈コメンテーター〉

尾崎正直（高知カツオ県民会議会長・高知県知事）

二平章（茨城大学人文学部客員研究員・カツオの資源生態・文化誌研究者）

〈パネリスト〉

宮田速雄（カツオ情報発信分科会座長・（株）高知新聞社代表取締役社長）

竹内太一（カツオ情報発信分科会副座長・（株）加寿翁コーポレーション代表取締役社長）

中村彰宏（カツオ消費・漁業分科会座長・（株）サニーマート代表取締役）

中田勝淑（カツオ消費・漁業分科会副座長・高知県かつお漁業協同組合組合長）

山崎道生（カツオ資源調査・保全分科会副座長・（株）山崎技研代表取締役会長）

岡内啓明（カツオ食文化分科会座長・（株）丸三代表取締役会長）

木村祐二（カツオ食文化分科会副座長・（株）ノーベル代表取締役）

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

あらためまして、高知大学の受田でございます。これから二平先生の基調講演を受けてパネルディスカッションを進めてまいりたいと思います。今日、このパネルディスカッション、実は時間として70分しか設けておりません。ご覧いただいて、ご登壇いただいている論客ばかりでございまして、しかも10人いらっしゃいますので、1人が7分しゃべればもう終わりという、それぐらいスケジュールが非常にタイトであるということをご理解いただけるのではないかと思います。この時間をなるべくぎゅぎゅっと圧縮して、濃厚な議論を進めてまいりたいと思いますので、皆様、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

これからの進め方、まず目的なんですけれども、ご登壇いただいている皆様は、皆様のお手元に高知カツオ県民会議の組織に関するご案内があるかと思いますが、この分科会の座長及び副座長予定者の皆様でございます。この副座長、座長の皆様に、各分科会のねらいと、それからこの一年間どういう活動を進めていって、そして、具体的に何を行動計画にしていくのか。こういったあたりをしっかりお話をさせていただこうと思っております。

これを踏まえて、今日会場にお越しをいただいている高知カツオ県民会議の委員の皆様に、これから分科会活動を選んでいただく一つの貴重な材料にさせていただこうというのが趣旨でございます。

あわせてこのあと、横の関係も含めて、各分科会同士の相互の活動についても議論してまいります。

先ほども申し上げましたとおり、今回のシンポジウムと分科会活動が高知カツオ県民会議の主要な事業ということになってまいりますので、これらを皆様にしっかりと説明をし、共有することによって、広く県民の皆様のご期待に添っていけるような形に私ども、このカツオ県民会議を大いに発展をさせていきたいと、この場に、この討論を位置づけさせていただきたいと考えている次第でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、今日、ご登壇いただいている皆様に簡単にご紹介いたします。皆様から向かって左側、パネリストお一人目は、情報発信分科会座長で高知新聞代表取締役社長の宮田さんです。宮田さん、よろしくお願い致します。

○宮田（パネリスト カツオ情報発信分科会座長）

宮田でございます。どうかよろしくお願い致します。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

続いて、同じく情報発信分科会副座長でいらっしゃいます、司・加寿翁コーポレーション代表取締役社長の竹内さんです。

○竹内（パネリスト カツオ情報発信分科会副座長）

竹内です。よろしくお願い致します。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

さらに、消費・漁業分科会の座長をお務めのサニーマート 代表取締役の中村さんです。

○中村（パネリスト カツオ消費・漁業分科会座長）

中村です。よろしくお願い致します。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

そして同じく副座長の高知県かつお漁業協同組合組合長の中田さんです。

○中田（パネリスト カツオ消費・漁業分科会副座長）

中田です。よろしくお願い致します。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

さらに食文化分科会の座長、丸三 代表取締役の岡内さんです。

○岡内（パネリスト カツオ食文化分科会座長）

岡内でございます。よろしくお願いします。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

同じく副座長のノーベル代表取締役の木村さんです。

○木村（パネリスト カツオ食文化分科会副座長）

木村です。よろしくお願いします。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

そしてパネリスト最後は、資源調査・保全分科会、実はこれ、私が座長を務めておりますが、副座長をお務めの山崎技研の山崎さんです。

○山崎（パネリスト カツオ資源調査・保全分科会副座長）

こんにちは。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

ありがとうございました。

さらに皆様から向かって左側お二人でございます。まず、カツオ県民会議会長の尾崎知事です。

○尾崎（コメンテーター）

尾崎でございます。よろしくお願いします。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

そして、先ほど基調講演をお願いいたしました二平先生です。

○二平（コメンテーター）

二平です。よろしくお願いします。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

いかに時間を短縮しようとしてるかおわかりいただけたかと思いますが、こういう調子で圧縮していきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

じゃあ、最初に各分科会、4分科会ございますが、最初は情報発信分科会の宮田さんと竹内さんからこの分科会に関してご説明をいただきたいと思います。

誠に申し訳ありませんが各分科会5分程度でよろしくお願いいたします。

○宮田（パネリスト カツオ情報発信分科会座長）

はい。2人で5分ですので、1人2分半、私が2分ぐらい取ろうとっております。

この運動を進展させるうえで一つのカギを握っているのは、消費者の行動だと思っております。情報発信分科会はその消費者の方々にいかに訴え、そして行動してもらうかという役割を担っていると思っております。

漁業資源問題はこれまでクロマグロ、あるいはウナギ、そういったものは継続的にたびたび取り上げられておりまして、注目を集めておりますが、カツオについては単発的に漁獲量が減少していると、そういったニュースはあっても、さほど危機意識を持って話題になることはなかったように思います。

消費者の方々もカツオが食べられなくなるかもしれないなどと、そういうことは夢にも思っていないのではないかと思います。今日、二平先生のお話を聞いたことで、それは現実であり得ることだということがある程度理解できたのではないかと思います。この現状認識、そして危機感を県民、そしてさらに国民に持っていただくために情報発信分科会があるということでもあります。

この会議には、地元のメディアはもちろんですが、全国紙の支局の方々、通信社、あるいはテレビ局、それぞれおられますので、まずオール高知で、まず高知県民の方々に危機意識を持っていただくと。そのうえで、これは高知県に限らず全国的なテーマでございます。あるいは全地球的なテーマでもあるわけですので、ぜひ全国紙、あるいは通信社、テレビ局の皆さん方は、全国版の紙面、あるいは、全国ネットの番組で取り上げていただくと、そういう工夫、努力をお願いしたいと思っております。また、高知新聞は全国各地の地方紙とネットワークを持っております。こうしたところ、ネットワークを使って運動の輪を拡げていきたいと、このように思っております。

一方で現在は、ネットの時代でございます。マスメディアだけではなかなかカバーしきれない、そういう部分も相当ございます。SNSを駆使する方策もこれから探っていきたいと思っておりますが、いずれにしてもこの問題は、最後は行政、政治家、そして国に動いてもらわないとなかなか問題解決には至らないということでもあります。

その行政、政治家、そして国を動かす原動力になるのは、まず消費者の意識、行動です。ここが政治家も行政も国も、ある意味で一番恐れている部分でございますので、その消費者の意識、行動をわれわれと一緒に国を動かす構図をつくっていききたいと、このように考えております。ぜひ皆さん方のご協力もお願いしたいと思います。

それでは、具体的なことについて、竹内さんからお願いします。

○竹内（パネリスト カツオ情報発信分科会副座長）

われわれはカツオ情報発信分科会です。皆様のお手元にお配りした分科会の活動方針に沿ってお話をさせていただきます。

本分科会の活動と目的というのが5つ書いてありますが、1つは、高知県民及び全国にカツオ資源の現状と課題について不断に情報発信する。それにより共通認識を持っていたと同時に運動の輪を拡げると。先ほど宮田社長からお話が出ましたように、やはり全国的な輪をどうやって拡げるかということに1つ置いています。

それから分科会会員……、たまたま私どもの会員の入っていただいている方はマスコミ関係の方も多いので、その会員の方のお知恵も借りて、カツオ資源に関するアーカイブ機能を設置して、全国のマスコミ関係者やカツオ資源に関係のある方々に情報検索を容易にすると。これ、結構大きな重要な仕事だと思っております。

それから水産資源の専門家を講師に招聘して、勉強会及び意見の交換会を2カ月に1回、もしくは毎月開催していこうと。

それから4番目、国内のカツオ一本釣りの業者、それからそういう団体……、今日、中田代表、組合長がお見えになっていますが、そういう宮崎とか、ほかのカツオの県ですね、国内のそういう団体との連携。それから海外にも一本釣りの国際一本釣り連盟というのがございまして、そういうところ。それから島嶼国です。島嶼国は必ずしもわれわれのほうではない国もありますが、そういうところもやっぱり情報交換、ネットワークづくりをしていかななくては……。

二平先生から少しお話があったように、カツオとマグロの国際的な国別の漁獲割り当てというのは WCPFC という国際会議がありまして、今年はフィリピンであるんですが、そういうところにも出て行って、ネットワーク、人脈づくりをしよう。12月のフィリピンで開催される中西部太平洋地域の WCPFC の会議には、われわれのメンバーも、任意ですけど参加して、参加することによってネットワーク、それから水産庁の方も来てますし、そういう方にも背中を押すことができるんじゃないかというふうに考えております。

最後は目的になりますが、カツオ資源に関する国内世論の喚起や海外諸団体の連携によりわが国の水産外交を後押しする。WCPFCにおける国別の資源保全の枠組みを構築し、持続可能なカツオ資源の確保及び最終目標である日本近海へのカツオの来遊を復活させる。これ、非常に道のりは遠いと思いますが、これを高知県がやらなくて誰がやるんだというふうに考えておまして、戦場が国際会議ですけれど、高知からまず旗をあげ、それから日本の全体にもそういうムーブメントを起こし、で、国際という方向を今考えております。以上であります。ありがとうございました。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

ありがとうございました。

では、続いて、カツオ消費・漁業分科会の活動に関して、中村さん、そして中田さんからお願いいたします。

○中村（パネリスト カツオ消費・漁業分科会座長）

はい。よろしくお願いします。

非常に志の高い世界的な話のあとで、話しにくいところもあるんですが、消費と漁業ということで、まずは消費についてどうあるべきか。今の高知県の消費者がカツオについてどういう意識を持っているのかということがすごく大事なことなんじゃないかなというふうに考えています。高知県にとって観光面でも食卓の面でもカツオというのは非常に大事なもので、その資源が減ってるという現状は現状です。

ですけれども、先ほど話もありましたように、カツオがなくなるという認識は持ってない消費者の方が多数じゃないでしょうか。じゃあ、今どういうふうな現状なのか、どういうふうなことになっているのかということをもっと勉強したいなと。そして、またカツオの消費に関していえば、どういうふうに消費というものがあるべきなのかということをも、歴史も通して勉強し、認識し、それを県民の方々、また観光客の方々に発信していきたいというふうに考えています。

例えば、意識の面でいうと、高知の消費者の方、カツオのたたきは、私どもスーパーマーケットをやっておりますけれども、一年中魚の売場に並んでいるのがもう既に常識になっていますよね。本当にそれでいいのかなと考えさせられるところもあります。秋になればサンマが食べたい。春になればタケノコが出てくる。そういう時期によつての食べ物もあります。

カツオって、スーパーマーケット……、宣伝ではないですけども、この時期には「初がつお」というふうにチラシに出しているんですね。じゃあ、消費者の方々が、今、私、40代後半ですけども、30代、40代の方が初がつおを出して反応してくれるのか。一年中売場に並んでいるじゃないかというような、本当に今、消費者の意識にしても消費のあり方についても再度考えるべきときじゃないかなというふうに思っています。

ですから世界的なレベルの話も非常に大事なんですけども、高知県の消費者、また観光客に対しての消費についての考え方というのを再度皆さんと一緒に検討して発信していきたいというふうに思っています。漁については中田さんのほうからよろしくお願いします。

○中田（パネリスト カツオ消費・漁業分科会副座長）

カツオ消費・漁業分科会ですので、私は特に漁業者として皆様とそういう漁業のことについて議論していきたいと。カツオ一本釣り漁業は、カツオ資源に漁獲圧を与えず、持続的に資源を利用することのできる優れた漁法です。二平さんからあったように江戸時代から続いている漁法がカツオ一本釣り漁業です。県民の皆様と高知にはこんな優れた漁法でカツオを捕っていることを誇りに思っていたら、分科会で一緒に勉強していきたいと思っております。

こういう場面でいろいろ規制、規制ということであるんですが、今、マグロで規制があって、二平さん、一生懸命やってるんですけども、零細の漁業者が非常に迷惑をかけて

るといような状況もあります。そういうことのないように、規制があってもわれわれ漁業者の声としてあげていきたいというふうに思っております。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

ありがとうございました。

それでは、続いてカツオ食文化分科会に関して、岡内さん、木村さん、お願いいたします。

○岡内（パネリスト カツオ食文化分科会座長）

食文化分科会は、カツオの食文化をさらに推進をしようということを目的として運営をしようと考えております。まずは県民の皆様方にカツオについての知識や効用についてのさらに深いお考えを持っていただく。また、カツオのマイスター制度を導入しようとして、だしとしてのカツオのさらなる価値づくりをしたいということを掲げております。

具体的には、県民の皆様方がカツオのうんちくを語れるような小冊子をまずは作りたい。そのひな形は、実は伏線としてもうありますので、少しほかのいろんなエレメントも加えて、この秋にやるシンポジウムのころには、『土佐カツオうんちく辞典』というような形のものがお配りができると思います。

枕崎のカツオマイスター制度の話がございましたが、枕崎のほうのマイスター制度を調査・研究をしながら、高知独自のものをつくり上げたいということを考えております。

枕崎のほうは、一般市民の方もマイスター制度にというようなお考えで取り組まれているようでありまして、高知の場合は、特にやっぱり個人の技術者、専門家、このカツオに関わる漁業関連の皆様方がプロとして本当に認定される、そういうような認定制度をつかっていったらどうかなというふうに思っています。

これは、例えば技術者の方がそういう資格を取れば、技術者が勤めておられるお店が「カツオマイスターのいる店」ということになりますので、本当の意味で高知がまさにカツオの権威づけができていくということを考えております。

あと、カツオのだしにつきましては、本鰹のだしだけではなくて、宗田節とか、本当に世界に誇れる今の和の付加価値のもとになっているだしがありますから、そういうものを広く研究をしながら、明日への付加価値づくりをしたいということを考えています。

○木村（パネリスト カツオ食文化分科会副座長）

岡内座長のほうからお話がありましたが、高知ではカツオのことを「本鰹（ほんがつお）」と呼びます。おそらく日本中でカツオのことを本鰹と呼ぶ県はあまりないんじゃないかと思うんですが。それはなぜかと言うと、カツオ以外にもハガツオ、スマガツオ、宗田節になるカツオと、いろんなカツオの種類があるからカツオそのもののことを高知の人は本鰹と呼んだりします。

先ほどうちく本の話がありましたが、そういったカツオも含めて、一度ここで高知のカツオの食文化を整理したらどうか。そういった意味合いも含めてうちく本を作ろうと。その中には、先ほど竹内さんがおっしゃったような旬の話も多分出てくるんじゃないだろうかというふうに思っています。

マイスターについては、まさに高知のカツオを食べる、そういった文化の磨き上げをやり直すんだと。マイスターがあるお店へ行くと……。高知のお店はどこへ行っても、まず、カツオはまずいところはないんですが、さらに磨き上げをするという意味でのマイスター制度をどう実際につくり上げて、仕上げていくのかというのがこれからの課題であるというふうに考えております。以上です。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

ありがとうございました。

それでは最後に資源調査・保全分科会、ここは山崎副座長からお願いいたします。

○山崎（パネリスト カツオ資源調査・保全分科会副座長）

この分科会は、きちんと調べる。それからどういうふうにして欲しい、どういうふうにしたらいのかを中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）でアピールしていくと。そういう研究して、アピールすると。外部に対して一番戦闘的な部署かもしれません。

皆さん、パネリストもコメンテーターさんもインテリばかりで、高知県人らしい「いられ」やら「いごっそう」の戦闘的な本来のところの血も騒ぐんで頑張りたいと思っています。こういうふうに高知の会がかしこまって、ワーワー言わんと進行するってどうも気に入りませんので。

趣味で25年ほど前からずっと小さな船でカツオを釣りに行ってます。その始めたころは、1航海というか、1日で200キロ、300キロ、きれいに釣れてましたが、それが近年さっぱりで。私の仲間が先週行ったところによると、はるばる1時間半かけて南へ出て、燃料500リットルたいて、7匹だったそうです。非常にリアルな話で、私も昔、随分捕ったので恩返しじゃないけど頑張ろうと思っています。以上です。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会座長）

ありがとうございました。

今、資源調査・保全分科会は、山崎副座長、方針をお話しされましたけど、私も座長の立場で、ここをしっかりと毎月いろんな情報をいただきながら、それをわれわれなりに理解をして、そして、これをどういうふうに発信していったらいいのかということ、「戦闘的に」とおっしゃられましたけれども、前向きに、かつクリエイティブに議論して提案をしていきたいと思っているところでございます。こういう話になると山崎さんから怒られそうですけど、いいですよ。

○山崎（パネリスト カツオ資源調査・保全分科会副座長）

難しく言うと、このまぐろ類委員会というのは、国益を超えた、損得を超えた人類全体の哲学なり、立派さが試されるような場ですんで、そこに通用する言葉、そういう事実、どのようにきちんをつくっていくか。そこらへんが勝負かなと思っています。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

というところで、2人で分科会をここは担っていこうと思っています。

さて、今、4分科会に関して、それぞれの座長、副座長の思いを5分程度でしたけれどもお話をさせていただきました。

ちょっとここで二平先生に伺いたいんですけど、こういう分科会を中心にカツオ県民会議を回していきたいと思っています。今、各分科会の座長、副座長のお話をお聞きになられて、何かお感じになられたこと、あるいは、今の時点でのアドバイスございますか。

○二平（コメンテーター）

よろしいですか。

私、最初、この県民会議が立ち上がるというニュースを見て、それからメンバーの方々のいろいろな肩書きを見せていただいて、まずこれ、すごい組織だなというふうに思いました。素晴らしいなど。

私、本当に茨城は生まれの地ですけども、カツオ40年の研究やってるんで、高知に何回も来てるんで高知が第二の故郷みたいなんですが、本当に高知=カツオ、カツオ=高知ですよ。やっぱりね、私のほうから見ても。そこがこういう会議を設立していただいて、しかも僕はやっぱり大事なことだと思うんですが……。漁業者の集まりはいっぱいあったんです、今まで。私もシンポジウム、いっぱいやりましたけど。だけど、本当に商工業界の中心になって、産業界、それから地域、県、国というところへ影響力を持っておられるこういう方々が一堂に会してまずこのカツオについてやっぱりもう一回、カツオの高知、高知のカツオを立ち上げようというふうに思われたというのは素晴らしいことだと思います。それをぜひどんどん実らせていっていただきたいなというふうに思いました。まずですね。

それから、それぞれの分科会のお話をお聞きして、特にどうこうということはないですけど、やっぱり素晴らしい中身なので本当にこれで進めていっていただきたいというふうには思います。

ちょっと私も前からいろいろ感じていることであるのは、1つは、私は、ほかのところに行っているんな話をするので、「二平さん、地元で何やってるの？」というふうに必ず言われると思って、9年前から「魚の美味しいまちちなか推進協議会」というのを商工会議所につくっていただいて、会頭と僕、仲いいもんですから。それで、漁業と商工が一体となってまちづくりを9年間やってきてるんです。

いっぱいいろんなことやりましたが、この間、市議会で議員さん全員一致で魚食普及推進条例を可決してくれました。これは非常な力に今なっています。本当に役所がそういう方向を向いてくれたと。やっぱり役所と民間というのはなかなか難しいところがあったんですけど、そういうふうなことを今進めています。

ここの分科会の中にも書いてありますけども、漁業のことを一般の消費者の方、魚のことを一般の消費者の方によく知っていただくというところから僕は始めました。ただ理屈だけ言わないで、一緒に魚を食べる会をやったんです。「旬魚万来サロン」という名前をつけました。捕る人、それから料理をする人、それから食べる人。料理をする人はプロにボランティアでやっていただきました、商工会議所ですからね。捕るほうは原価提供で魚を提供していただく。プロに料理を作っていただいて、募集をして食べていただく。ただ食べていただくんじゃなくて、そこで茨城の魚の良さとか、それから漁業だとか、歴史も含めて、道具も会場に持ってきて、こんな道具で釣ったり、捕ったりするんですよとか。そういう漁業のことをお話をしながら食べる会をやったんです。

これが大正解で、最初 30 人ぐらいで何回かやればいいのかと思ったら、毎回 100 人ぐらい集まっちゃって、料理をするのが大変、作るのが大変なぐらいで。だけどもものすごい評判。これに市長さん、議長さんとかみんな毎回来てくれる。これが力になって条例化になっていったということがあるので。

そういう中で一般の市民の方はあんまり漁業のことだとか、日本の漁業がどんなになるか、そういうことはあまりわからないんですね。そういうことをやっぱり知っていただくということをまずスタートさせて、それが今、条例化にまでなったので、これからが本番のところに入って、今度は本当にシャッター街化している商店街を元気にしていく活動をどうやってつくっていくかというのを、自分たちでこれから回していくところです。そういうことをやっています。参考になるかわからないけれど、同じことだと思うんですね。共通すると思います。

それであと、ちょっと WCPFC との関係で国際的な問題では、やっぱり国と国との話だと背中に国旗を背負った交渉になっていくのでなかなか難しい面もあると思うんですが、日本と同じように、ニュージーランドだとか、それぞれの島の小さな漁業の人たちは、大きいまき網がカツオを捕っちゃうもんだからやっぱり困ってるんです。そういう人たちがいっぱいいるんですよ。けどそういう人たちはなかなか声がそういう会議で出せないの、そういう人たちと連携をしながら国際的に情報発信をして、やっぱり小さな漁業者を傷めないように、伝統的な漁法を大切にすることも大切なんじゃないかと、こういう家族漁業を大事にしていく。そういう取り組みを本当に国際的な取り組みとしてやっていただければありがたいなど。その中心にこういう県民会議さんなんか立ち上がればものすごい力になると思うので、ぜひ頑張っていただきたいというふうに思ってます。よろしくをお願いします。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

はい。ありがとうございます。

もう今のコメントで大変参考になるようなお話がありました。条例化していく。条例に何をするかというところがまず重要なポイントだと思うんですけど、条例という話が知事、出しましたが。行政が一つやれること。

○尾崎（コメンテーター）

行政が条例化していくというのも大事かもしれませんが、県民運動にしていくということが大事なんでしょうね。だから条例というのは県民運動の一つの象徴であって、そういう意味において、まずこちらは県民会議が先にあるということだろうと思いますし。

逆に言うと、高知県議会、今、手元に持ってますけど、「カツオ資源の実効ある管理措置の強化に関する意見書」というのがこの間の県議会、今日、議長もおいでになってますけど、全会一致で可決されたりして、ある意味、県議会も大変本気ですのでね。そういう意味においては、そういう点は、逆に言うと心配はないんだろうと思うんですけどね。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。

それで、今、二平先生の話の中で WCPFC っていう言葉が出てまいりました。国際的な交渉の場として、この WCPFC っていうのは非常に重要だと思います。会場の皆様にとってみると、まだ WCPFC って何なのか。中西部太平洋まぐろ類委員会だ、という話なんですけど、ここはどうですかね。知事もしくは竹内さん、少し補足していただけますか。

○竹内（パネリスト カツオ情報発信分科会副座長）

補足というか、中西部太平洋地域、島嶼国含めて 27 カ国、28 カ国、太平洋の西側で簡単に言うと漁獲しているマグロ、カツオ類のルールづくりの会が年に 2 回あって、WCPFC の本会議というのが年に 1 回あるんですけど、そこでいろんなことが決まるんです。

なぜ、カツオを……。僕は最初ちょっと難しいなと思ってたんですけど、インド洋の同じようなまぐろ類委員会というのがあります。モルディブという国が一本釣りの国なんですけど、人口 40 万人の国です。そこの国の人、インド洋の国別のカツオの漁獲割り当てのルールづくりをしています。結局は、国別のルールづくりは、今 WCPFC の中がない。だから捕り放題だと。先ほど、二平先生からお話があったように、漁獲する圧力は上がって、いくらでも捕っていたらなくなるというのは目に見える。それをモルディブがインド洋でやったということが非常に励みになりました。だから、そういうことで、国際会議でそういうルールを、国別の漁獲割り当て、カツオならカツオ、これが一つのゴール……。ゴールというか、それで来遊量が増えることがゴールになりますけど、こういうことを高知が旗あげてやったらどうかなということが……。WCPFC のあれになったでしょ

うか。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

そうですね。知事いかがですか、この WCPFC の存在。

○尾崎（コメンテーター）

このカツオの資源管理の問題について、今までまったく誰も何もしていなかったのかというと決してそうではなくて。例えば水産庁さんなんかにしても、さっき二平先生のお話にもありましたけど、相当一生懸命やってきてくれたのは間違いありません。私も知事に就任したばかりのころ、最初、水産庁にお伺いしたあたりというのは、まだ、2007 年ぐらいというのは、「いや、そんな減ってないんじゃないですかね」という感じでしたけれども。たださっきのデータから見ても明らかにもう減っていく時期が、昔でいうところの一番少ないころというのは、今でいう多いころというようなことになってしまった、こういう現状を見て、やっぱりおかしいと。そういうことで水産庁さんも危機感を持って、この WCPFC に対して訴えもしてくださっています。

そういう中で、例えば、カツオの資源量を何もしなかったときに比べて 50% ぐらいまでは回復をさせていくべきだとか、そういう方針を打ち立てたりして対応してくれようとしています。ただ、例えば、漁は一切していなかったときに比べての 50% ぐらいまでは回復させますよという目標とか、もっというと、漁獲規制についての明確な規制がないとか、まだまだ、ちょっとこれでは弱いんじゃないかと。50% じゃ足りない、60% ぐらいにすべきじゃないとか、そういうことを。例えば、私は明明後日、木曜日、金曜日と水産庁も行って、政策提言する予定なんですね。

ただ、ただ、一言で言うと、島嶼国はじめ、まき網で魚をたくさん捕って暮らしている国民がたくさんいる国があるわけです。私たちが今ここでカツオについて危機意識を持っている反面、漁獲規制なんかされちゃったら暮らしが成り立たないんじゃないかと思ってる島民がたくさんいる、そういう国々がたくさん。そういう国々との国際交渉なわけですよ。だから私たちの声を強くしないといけないから国民としての声、議論を盛り上げようじゃないか、これが第一。

ただ、さっき私、二平先生のご議論を聞いてて、ああ、多分 Win-Win の関係を築けるのかもしれないなど、チラッと思ったんです。それは何なのかというと、熱帯域においても明らかに資源が大きく減少しつつあるという。だから多分、熱帯域で、まき網で魚を捕ってる国々の皆さんにも、今のようなことをしてたら自分で自分の首を絞めることになりまますよということを訴えて、ともに……。まさにさっき山崎さん言われたことかと思いますが、世界全体のことをともに考えようと、育成のことを考えようという話なのだからと、おっしゃったとおり、お互いに自主的に規制しましょうという、そういう道を探ることができるんじゃないのかなと思いました。

だからそういう意味においてよくいい形でデータを取って、日本近海に減っている、その淵源たるものは熱帯域において捕りすぎだ。結果として、熱帯域でももう相当減ってきてると。これは全人類として問題ではないかというふうに持っていくことができれば、Win-Win の関係として良き合意を得られるんじゃないかなと、そう思いましたですけどね。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

そうですね。という話は、例えば、われわれもカツオ学会で、いかに世界全体が仲間になっていくのか。それぞれの国のエゴであるとか、産業政策の、主語を自分とした主張だけでは解決はしないだろうと。ですから、仲間づくりだという話があり。

もう一方、さっき二平先生のお話の中で、日本の消費のあり方と連動しているんだというお話があって、日本の国内での世論形成と仲間づくり、思いを一つにすることの大切さというところにまたつながっていくんですね。

こういうところで先ほど、このメンバー、漁業従事者から消費に至るまで、いろんな商工業の皆さんも入った県民会議であるということなので、特に消費のあり方であるとか、その仲間づくりの基本である、本来のあるべき姿というところに思いを馳せ、そして、皆さんの意見をしっかりと聞き、まとめていくということが重要になっていくんじゃないかと思うんですね。

そういう面で、まず最初に消費のところを担っておられる中村さんに、少し、さっきはまだ物足りなかったと思うんですけども、思いの丈を述べていただけませんか。

○中村（パネリスト カツオ消費・漁業分科会座長）

はい。先ほども話したように、本当に高知県民にとってカツオというのは空気のようなもので、よくお客さんや高知県の人にも、売ってるカツオは高知で揚がったカツオやというふうに思われている方がたくさんいます。それぐらいものですよ。ここに来られている方で、高知城をきちっと案内できる人は、多分あまりいないんじゃないかなと。僕もできません。カツオというものもそういう存在になってるんじゃないかというふうに思います。ですから、普通にあって当たり前のものが今なくなりかけてる。なくなりかけてることもわかってない。

皆さん、マグロのほうがよく知ってると思います、カツオのことより。今危機な状態や。漁獲制限がかかっている。食べられなくなるかもしれないというふうなことは、たくさん報道があります。ウナギも高知県、養殖がどんどん減ってますから、そういう身近にすごく値段が上がった、すごく減ってるんやなというのは感じてると思います。けれども、カツオでも、今、二平先生やいろいろな方のお話を聞くと、同じ道をたどろうとしてるんですね。じゃあ、そうしたときに消費のあり方というのはどうなけばならないのかですとか、ここから先、高知県民とカツオとの関係をどういうふうに考えていかなければいけないのかということ、とにかく委員の皆さんといろいろな議論をしてみたいなというふ

うに思います。

先ほど尾崎知事のほうから、各国のそれぞれの事情があって、いろんな消費の仕方があって、漁業があって、それぞれの国の、どちらが正解とも言い難いところが多分あると思います。何が正解かというのは、本当にこれから今の状況や環境をもう一回勉強して、きちっと正しい情報を入れて、皆さんと色々な意見を交わしながらこれからの高知の消費について考えていきたいというふうに思います。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

さっき二平先生の（話の）中で、一般の方に食べてもらいながら、それでよりよく知っていただく場というお話でした。そういう点に関していかがですか。

○中村（パネリスト カツオ消費・漁業分科会座長）

食べていただくというのもそうなんですけど、本当に地道な活動をしていきたいなというふうに思っています。書かせてもらっていますけれども、例えば、県内の学校なんかで、小学校、中学校、今の高知のカツオについてどうなのかとか、漁法について、漁について、また、うちだけではないですけど、量販店や飲食店で、ここにも MSC、MEL というのは、持続可能な漁業としての認定なんですけれども、そういうカツオを使ってるというようなところ。そのカツオというのは、今の話の中でいうと、マグロでいってもご馳走になってくるわけですよね。けれども消費者の方は普通のカツオと同じように取り扱ってますし。そういうことをきちっと情報を伝えて地道にやっていきたいなと思っています。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。

今、MSC、MEL って出てきたんですけど、今、2020 年の東京オリンピックの開催に向けて、選手村での食材のあり方に関していろいろな議論が進んでいます。それで水産物に関しては、MEL をという、MEL ジャパンでしょうか、という話もあるんですけど、この取り組みはもう中田さんのところでは既に手がけておられますね。MEL というのが一体どういうもので、今の取り組みがどういう状況にあるのか、少しご説明いただけますか。

○中田（パネリスト カツオ消費・漁業分科会副座長）

われわれは全国近海かつお・まぐろ漁業協会というところに、MEL が始まった当初から参加しております。というのは、この MEL ということは、資源的に優しいということと、それで、ちゃんとして取り扱おうというのがまずこの MEL の目的です。MSC というのは、これは世界的なやつなんですけども、MEL というのはその日本版というふうに考えていただいといていいと思います。

われわれはそれで、一本釣りでこういうふうにカツオを大事に捕ってるということで認

証されまして、今でも MEL という認証をずっと受けてやっております。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

そういうふうに、例えばこのカツオはどういうふうな取り扱いを受けてきたか。で、資源に優しい。漁獲圧力をかけない、非常に優しい漁法を MEL、マリン・エコラベル（Marine Eco-Label）として認証してもらっているというところを消費者までわかるように伝えていけば、それは価値が非常に伝わっていくもんですよ。

だから今申し上げたように、農産物でも JGAP というものの取り扱いを、というお話もあり、流れというか、その資源に優しい食材を追求していかなければいけないといううねりが起きそうになっているのも実態だと思うんですよ。

で、こういうような知識をさらに県民の皆さんが全員知っていて、価格ももちろん大事な消費者行動の判断規準ではあるんですけども、もっとその価値として環境に優しい、資源に優しい、持続可能性のあるものを求めていくような世界になれば、この高知県というのは、また極めて誇り高い、われわれとしては自慢できる地域になっていくんでしょうね。

例えば、岡内さん、こういう消費者の行動のあり方なんかもマイスター制度の中には入れていく予定なんですか。

○岡内（パネリスト カツオ食文化分科会座長）

消費者の行動のあり方までマイスター制度の中に、今のところ考えはしてありませんが。私どものこの分科会で考えているのは、やっぱり、プロの技術者の方、また、漁業関連の方が、本当の目利きとか、素晴らしい料理を出すとか、栄養についての具体的な説明ができるとかいうようなところの権威づけをマイスター制度でできたらということを考えています。

ですから消費のほうは、中村さんの分科会のほうで広くリサーチをしたり、周知徹底をいただきたいというふうに思っています。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。

竹内さん、MEL とか、MSC とか、例えば、司本店で、今日のメニューの中で、これは MEL だとか、MSC とかってわかるんですか。

○竹内（パネリスト カツオ情報発信分科会副座長）

まったくわからないですね。

ただね、ちょっとだけ寄り道すると、MEL と MSC ってあるんですけど、カツオの一本釣りが国際的な連携をしようと思ったら MSC を取ることが一番いいですね。MEL というのは国内

だけの認証ですから、あんまり国際的なあれはまだ全然できてないんです。それは MEL が悪いという意味じゃないですけど、ちょっと誤解して……。MEL を取ったらゴールではなくて、世界的なエコラベル、それをやってる漁業者とリンクするにはやっぱり MSC は非常に重要なあれだと思います。

それから、ヨーロッパとか。アメリカは、MSC マークのやつと、それから自然に優しい持続可能な漁業じゃない……。同じ魚が並んでいて、MSC に対してはちょっと高くても買うという消費行動が今、普通になってきています。だから、エコラベルもある程度消費者が認知しないと……。われわれの子どものためにもこっちを買おうと、10 円高くてもこっちを買おうとかいう行動があらではあるんですけど、まだそこまでいってないですね。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

情報をいかに発信していき、その価値というものを現場から市場まで余すところなく伝えていく、正確に。そこが一通貫していけば、価値観自体がまったく今とは変わっていくんでしょね。

ですから、こういうところで情報発信の分科会の持っている今後の活動というのは、すべて重要なんですけれども、非常に大きいんだろうなと思っています。

宮田さん、今、いろいろカツオに関して資源もこういう状況であるということをメディアを通じて発信をしていただいているんですけども、それに対して消費者の受け止め方というか、読者の受け止め方というのはどうなんでしょう。徐々に知識のレベルが上がってきているんでしょうか。

○宮田（パネリスト カツオ情報発信分科会座長）

どうですかね。というのは、ちょっとどうしても新聞記事……。テレビもそうかもしれないですけど、硬い感じになるんですね、どうしてもね。それを、これ、私、ずっと思ってた。今日も排除したわけじゃないけど、男ばかりでしょう、ここ。ねえ。本来意識を変えるのは女性なんですよ。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

そうですね。

○宮田（パネリスト カツオ情報発信分科会座長）

だから買い物に行くのも女性だし、料理するのも女性で、男はそれを食って酒を飲んでいるだけのことなんで。女性がどれだけこういう運動に関わってくるかというのが結構重要なポイントだと思うんですよ。これから委員会をつくったらそこへ女性のメンバーをどんどん入れていかなきゃいけないし、女性が運動を始めたら結構うねりが早いんですよ、派閥もできますけど。(笑)

これからは、そういった形でいろいろつくって、情報発信を持続的にどんどんどんどんやってちょっとずつ変えていく。それが口コミになって拡がっていくような情報発信というのを考えなきゃいけないし。新聞だけだとどうしても書き方が硬くなるし、論文的になるんで、そのへんは SNS とか、いろんなものを使ってもっとわかりやすい情報発信というのもやらなきゃいけないなと思っております。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

そうですね。これ、カツオ県民会議なんですけど、この県民会議っていう言い方は、多分モデルとして経済同友会中心に GKH 県民会議というのが立ち上がったというのは、大いにこのきっかけになっているような気がするんですよ。その中心として木村さんが尽力されたんですけど、GKH 県民会議でかなり GKH に対する県民の認知って拡がっていったと思うんですよ。そのことを踏まえて、どうでしょう。木村さんは副座長としては食文化の分科会なんですけど、情報発信していくという視点で見たときにあの分科会にアドバイスはないですか。

○木村（パネリスト カツオ食文化分科会副座長）

ほかの分科会へのアドバイスって、そんなおこがましいことはまったくないんですが。

一本釣り漁法で捕ったカツオと、網で捕ったカツオがある。弘化台の方に聞くと、高知にほとんど網で捕ったカツオは飲食店とか、そういうところに流通してないというお話を私は聞いていますが。実際に、網で捕ったカツオと一本釣りで捕ったカツオ。一本釣りも遠くから捕ってくると氷詰めにして3日とか、4日かかって来るわけですね。土佐沖で捕れたら運が良ければその日のうちに食べられる。鹿児島で捕れば1日置いた翌日には入ってくる。それを実際に食べ比べてみて、やっぱり一本釣りのカツオがうまいねって、そういう機会がないんで、そういったことも実際やってみたらどうだろうか。

それで初めて、高知の一本釣りカツオが県民として誇りを持って、「高知のカツオ、うまいろう」と言えるような事実をきちっとつくる。それをうんちく本の中であるとか、そういうところに活かして、広く県民、それから県外の方々に発信をしていくというやり方がいいんじゃないかなと思います。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

なるほど。ありがとうございます。

その消費とか、それから発信をどういうふうにしていくか。そのベースになるのが客観的データということで、ここの部分が WCPFC においても非常にカギになっているということだと思います。さっき、二平さんの話の中にも、標識をしていく、アーカイバルタグのようなもののお話があったんですけども、こういう、現場で極めて精緻で、しかも先進のテクノロジーを駆使してしっかりと情報を把握していこうという動きもある。活動もあ

る。こういうこともあわせてしっかりと消費していかれる皆さんにお伝えもしていかないといけないんですね。だから調査の部分も保全も含めて、しっかりとどう伝えていくかという部分が重要になってくると思うんですね。

調査・保全に関して山崎副座長とともにやっていきますが、大きい課題ですね。

○山崎（パネリスト カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ちょっと話飛んじゃいますけど、さっきの宮田さんのお話で、確かに「カツオがなかったらおきやくにならんぞね」とか、「おらのアテはどうした？」とか、そういうカイワのうなりますから。それ、おばちゃんにどうやって広げるかいうたら、今日来てくれてる皆さんが奥さんに、難しいことは忘れたけど、真面目にやりゆうぞと、広げてもらわないかと。それを、せっかく来ていただいたんでぜひお願いしたいと。

それと、マグロは資源減りましたが、尾崎さんと一緒に研究してマグロ（の養殖）ができるようになりました。ただ、カツオは最低水温が 19℃を切る高知県では養殖できませんので、人工で増やすということは絶望です。ですからわれわれ、この形で頑張るしかありません。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

今日実は公式の来場者数が 300 人を超えているということです。大勢の皆様にお集まりいただいたことを主催者側としては大変うれしく、また、感謝申し上げる次第なんですけれども、さっき山崎さんがおっしゃったように、皆さんが何人の方に今日の話伝えてくださるかによって、今日のシンポジウムの価値、あるいは、高知カツオ県民会議の価値というのも決まってくると思います。また、普及の速度も非常にそれによって変わってくるんだろうと思います。「奥さんに」という話だと今日で 600 人しかいきませんので、もうちょっと増やしていただかないといけません。

そういうようなことをわれわれ念頭に置きつつ、徐々にこのパネルディスカッションも後半のほうに近づいていくんですけども、実は今日、参議院議員で自民党の水産部会長をお務めの中西祐介先生に会場にお越しいただいております。

ちょっと到着は遅れられたんですけども、前回の 2 月 9 日の第 1 回の「カツオ県民会議」拡大準備委員会にもご出席をさせていただいておりますので、この様子は十分ご理解いただいているということで。中西さん、この高知カツオ県民会議、今後国に対してもしっかりとこの動きをお伝えをしていきたいと思っておりますし、また、国のほうもしっかり受け止めていただいて、国際交渉というか、WCPFC を中心とした多国間でのさまざまな議論の材料にさせていただきたいと思ってるんですけども、一言、フロアのほうからで恐縮なんですけれども、コメント、いただけませんか。

○中西祐介（参議院議員）

国会日程で遅れて大変恐縮でございます。今、自民党の水産部会長をしている関係もございまして、なんとかこのカツオ県民会議には出席させていただきたいということで、今日参りました。

大変重要なテーマを、しかも県をあげて、一つの魚種に絞って、しかも4つの分科会に立脚したこの会議が設立されたということは、本当に意義あることだろうと思っておりますし、日本の中では当然初めての試みだろうし、当然世界でもないんだらうなというふうに思っておりますので、心からこの会議の繁栄を、発展をお祈り申し上げたいと思います。

今日は途中からですが少し伺っております、いくつか気づいた点、2点に絞ってお話をさせていただければと思うんですが。

まず、1つは、よくキーワードで出ました WCPFC という国際交渉の問題ですけれども、ご指摘のように十分日本の主張がまだまだ世界の中で通用していないという状況でございます。先ほど尾崎知事がおっしゃいましたとおり、各国の国益の取り方が全然立場が違うわけございまして、広く観点を持ちましたら、2050年ごろには、世界の人口が今から20億人以上増えるんですね。そのうえで、畜産とか、農産物を生産するよりも水産物でとろうというふうな傾向にありまして、推計ですが今から40年ほどすれば、水産物の消費量が1.5倍に世界でなるという状況でございます。今も伸び続けてますので、なぜ熱帯エリアの国々がそういうふうな大型まき網で捕ろうとしているかということ、世界の需要に合わせた、とにかく生産をしようということに基づいているわけでありまして、そうした観点を持たなければいけない。

そして、この間、3月30日に参議院の農林水産委員会で質問させていただいたときに、水産外交のPDCAを政府が責任を持って回していないんじゃないかというお話をさせていただきました。外交交渉では、政府の三役はしっかり会見の中でどういう交渉をして、次、どういうことをやるんだということを会見するんですが、水産外交では記者発表だけで、例えば漁連に一枚通知が行く。あるいは、水産関係の会社に通知を寄こすというだけであって、そこに対する戦略性とか、あるいはどういう外交交渉をこれからやっていくのかという作戦練りができてないと僕は思うんですね。

ですから、それをやるために、今、マグロでは今年の8月の交渉に向けて、広く国民の方々の意見を募ろうという取り組みをしてくれました。これをなんとかカツオにも広げてくれよという話をしたところ、ぜひやりましょうということで、その委員会の中でも副大臣からご答弁をいただきましたので、この県民会議のメンバーの方々に、WCPFCの傍聴もありがたいんですが、事前の弾込めとして、皆様のお知恵をいただければなというふうに思っております。

資源管理のことも大変重要なご指摘ございまして、消費のことで一つ付け加えさせていただきますならば、さっき申し上げたようにどんどん魚食が増えていくにつれて、同時に売買価格が上がっていきます。同じキロ単価でも価格がこれから1.5倍、2倍になっていくというふうな推計もある中で、仮に今、熱帯域の大型まき網をやめさせて、日本に回遊す

る魚が捕れたとしても、国内の流通価格が間違いなく上がっていくと思います。

なので、スーパーマーケットに行くと、私も妻と一緒に買い物に行きました。じゃあ、お魚、刺身が今まで買えてた額の倍になったときに、本当にこれをいただくようになるかどうか。あるいは、その希少価値というものを十分に認識してもらう必要があると思いますので、そうした観点に立ったこれからの会議の方向性ということを私もまた勉強させていただきたいと思いますので、今後ともよろしく申し上げます。ありがとうございました。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。水産外交の PDCA、しっかりわれわれも頭に刻み込んでおかないなといけないですね。

さて、実はサニーマートの中村さんがこれから福岡に旅立ちますので、ちょっと途中で中座をされます。ありがとうございました。

ということで、中村さんは退席をされましたが、あとのメンバーはちゃんといますのでご安心ください。

さて、とはいっても、もう徐々にこのパネルディスカッションも終了の時刻が近づいてまいりました。ここでパネリストの皆様、多分言い足りないことはたくさんあるんじゃないかとは思いますが、今の中西議員のお話も含めて、議論したこと、そして今日の二平先生の基調講演も含めて、今後カツオ県民会議を進めていく決意表明といえますか、皆様のお立場で一言ずつコメントをいただきたいと思います。

じゃあ、今度は山崎さんからお願いできますか。無茶振りしましたが。

○山崎（パネリスト カツオ資源調査・保全分科会副座長）

すごい無茶振り。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

すみません。無茶振りだそうなので宮田さんからいいですか。

○宮田（パネリスト カツオ情報発信分科会座長）

それも無茶振りやないですか。最初の打ち合わせではこっちがやることになった。(笑)

いや、真面目な話、本当にマスメディアだけではなかなか伝えきれない部分というのは相当あるんですね。これからかなり工夫して、どんな形で消費者の方々にこの危機的な現状をお伝えすることができるか。それにまずかかっていると思うんです。消費者のうねりができてくると、中西先生も動かざるを得ないんですよね。そこが一番政治家を動かす基準になると思うので、そういう観点でできるだけそういう危機感を共有する報道、あるいはいろいろな発信、そういったものを続けていきたいと思っています。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。

竹内さん、お願いします。

○竹内（パネリスト カツオ情報発信分科会副座長）

大げさに言えば、今までどおり、これまで何十年も何百年も美味しく手軽に高知県民がカツオを美味しく食べ続けれる最後の世代になるか、もしくは、こういうカツオ会議とかでカツオを守るために立ち上がって未来に残す最初の世代になるか、そういうつもりでこの会議をやっていきたいと思っております。山崎道生さんがさっき戦闘的やと言ったけど、多分、情報発信分科会も戦闘的な分科会になると思っておりますのでよろしくお願ひします。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

はい。ありがとうございました。

中村さんは退室されましたが、中田さん、いかがでしょう。

○中田（パネリスト カツオ消費・漁業分科会副座長）

われわれ、今、カツオがなくなる、なくなるということで非常に問題になってはいますが、漁業者としても、われわれカツオ一本釣り漁業船というのは非常に少なくなっています。カツオがなくなると同時に漁業も非常に厳しい状況ということも皆様にわかってもらい、いわゆるカツオ資源も大変だけどカツオ漁業者も大変ということはこの県民会議でわかっていたきたいなというふうに思っております。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。

続いて、岡内さん、お願いします。

○岡内（パネリスト カツオ食文化分科会座長）

カツオもマグロも動くことを止めると死んでしまう魚であります。ですからわれわれも動きを止めずに努力を重ねていきたいというふうに思います。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。

木村さん、お願いします。

○木村（パネリスト カツオ食文化分科会副座長）

ご紹介をするのを忘れていましたが、このカツオ食文化分科会の副座長、もう1人おいでまして、和建設の中澤社長も副座長としてこの分科会でご活躍いただけるようになっていきます。食通で有名ですんで、ぜひ一緒に頑張っていきたいというふうに思います。よろしくをお願いします。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございます。

最後は山崎さんなんですけれども、調査・保全分科会は、千頭さんが副座長をされるのではないかなというところは添えて、山崎さん、お願いします。

○山崎（パネリスト カツオ資源調査・保全分科会副座長）

親分、よろしく。

ちょっと叙情的なことを言います。一昔、高知から2時間ぐらい南へ出ると、穏やかな日があったらカツオの群れが、直径でかいのですと150メートル、小さいので30メートルぐらいですね。それが移動……、黒潮の境目をずっと何千匹の鳥の群れをバタバタ、バタバタしながら壮大なドラマがあった。

そのころは、足摺岬から室戸まで、ほぼ500メートル置きに引き縄の船がクルクル、クルクル線状に回ってたと、そういうのが失われると。それと、北極、寒いところの氷河がどンドン、どンドン減っていくと。両方とも人間の力で何とかできるのになあと、普段感じてます。

それと、パネリストの皆さんも直接実はカツオがおらんでも関係ない、商売にはほぼ関係ない方が非常に多いですが、郷土の魚、郷土の風土、郷土の酒の飲み方、その愛する生活パターン、そのために来ると。愛郷心、それから高知のいわゆる伝統の男気みたいなものをきちんと継承していかないかと。そういう形の動機で来てくださる方も結構おいでます。そういうことを誇りに思いながらまとまって頑張りたいと思います。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

ありがとうございました。

こういったメンバーで分科会を月1、あるいはそれ以上の頻度でしょうか、それぞれ活発に開催をしてくださるものと思っております。われわれもこの分科会でしっかりと目的達成のために努力をしてまいります。

県民会議としては、次回10月にまたシンポジウムを開催するように、幹事皆さんで議論してまいります。おそらくまた二平さんにはそういったところでわれわれに対する顧問的な立場で、ぜひ今後もよろしくご支援のほどをお願い申し上げたいと思います。

最後に、この高知カツオ県民会議会長のお立場でもいらっしゃいますので、結びのご挨拶を尾崎知事からいただきたいと思います。

○尾崎（コメンテーター）

わかりました。

たまに東京のアンテナショップに行くんです。このバッチとか隠して面が割れないようにしながらこっそりお客さんの声をずっと聞くんですよね、店頭で。そのとき……。いや、東京の人は僕のこと全然知らないの。ずっと聞いていると、やっぱりこういう声、よく聞こえてくるんですよ。「いろいろあるわね」と奥様が言う。ご主人が「いや、高知といたらやっぱりカツオだろう」とか言ってカツオのところへ行かれる。そういうのを何度か聞いたことがあります。

やっぱり高知といえばカツオ。何で高知といえばカツオなのか。それはやっぱり一言で言うと大事にしているからだと思うんですよね。釣るときも大事にしている。調理も本当に大事にして、そして食べる時も大事に食べてる。だからあれだけ美味しく、高知といえばカツオという話になるぐらい付加価値のあるものになってる。多分これをいろんな世界の人と共有することができればいいんだろうと思うんですね。

まき網で捕って缶詰工場に送って、ペットフードにする、キャットフードにする。そういうことじゃなくて、ぜひこういうふうにカツオって大事にしていけば、これだけ付加価値の付くものなのですよと。大事にすることで、これだけの力を発揮してくれるものですよと。そういうところを共有することができればなど。

資源の調査・保全のことについて、データ集め、熱帯域でどうかということをしっかり集めていく。あわせてこの食文化の分科会とか、それからまさにいろいろと消費者の分科会とか、そういうところでいかに大事にしてきたかということについてしっかりと発信できる体制を整え、この情報発信分科会でしっかりと発信をしていって。データとそういう大事にしてきたんだという、そういう価値観と、両方しっかりと発信することで世界のいろんな共感を得られるというふうに持っていければなど、そのように思いますね。

言うは易く行うは難しでしょうけど、ぜひ県民会議として頑張っていけることができればなど、そう思います。

○受田（ファシリテーター カツオ資源調査・保全分科会副座長）

どうもありがとうございました。それでは、このあたりでパネルディスカッションをお開きにさせていただきます。

われわれの宝、カツオを未来永劫受け継ぐべく、われわれから声を上げていくという運動にぜひ会場の皆様もお力添えのほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

パネリストの皆様、コメンテーターの尾崎知事、そして二平先生、長時間にわたりましてどうもありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。それでは、準備を整えていただいてご退席いただければと思います。

こんなに美味しく、カツオのお刺身にしろ、たたきにしろ、食べさせていただき、県外の人には自慢をしながら、カツオがこんな大変なことになっているんだということに気づかずにいる自分というものにある意味、ちょっとショックを受けた時間でもありましたが。高知カツオ県民会議の活動についてのパネル討論をお聞きいただきました。

それでは最後に、「高知カツオ県民会議 第1回シンポジウム」の閉会にあたり、高知カツオ県民会議会副会長、青木章泰よりご挨拶させていただきます。

閉会挨拶

青木章泰（高知カツオ県民会議会副会長）

○青木

皆さん、最後までお付き合いいただきまして誠にありがとうございます。

ただ今ご紹介に預かりました副会長の青木でございます。

まずは、本日のシンポジウム、日本カツオ学会の共催のもとに、そして、若林先生、二平先生をお迎えいたしまして、このシンポジウムが盛大に開催できましたこと、厚く御礼を申し上げたいと存じます。そして、また、皆様方にはお忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

このように多くの方々がおいでいただいたということは、カツオを愛して止まないすべての高知県民の気持ちの現れだと私はそのように受け止めておるところでございます。

既にお話が出ておりますように、高知県のカツオの消費量は全国一でございます。今やカツオのたたきは、高知県観光の看板でもございます。カツオのたたきの起源というのはいろんな説があるようでございますけれども、山内一豊公が食中毒の防止を理由にカツオの刺身を禁じたところ、表面だけを焼いて焼き魚と称して食べるようになったという、この説を私は支持をしたいと考えております。と言いますのは、そこまでしても食べたい。そういう気持ちに共感を覚えるからでございます。

またカツオは、高知県の産業や雇用を支える大切な資源であるだけでなく、鰹節などの日本のだし文化、これは全国民が関わってまいります。カツオの刺身を食るとか、食べないとかいうことではなしに、日本のだし文化。これとそして、ひいてはこの世界文化遺産となりました和食文化と密接に関わる重要な食材だと思います。ここを少しアピールをしていくということも極めて大事なことでないだろうかというふうに思います。

カツオの歴史的な不漁は地球温暖化や乱獲などの要因が指摘をされておるところでございますけれども、既にこれはお話がありましたように、高知の問題の域を超えて日本全体の問題にまで発展をしておりますし、それ以上に関係している世界の国々に関わってくる問題でございます。

何よりも大事なことは、資源としての適切な取り扱いではないでしょうか。遅きに失する前に漁業、消費を含めた最適化を図る、このことが大変重要だというふうに思います。そういう意味では、この問題は資源の持続性、そして、文化としての食をどう守っていくか。この二点に尽きるのではないだろうか、そのように思っております。

この重要な解決に向けての先鞭を付けるのは私たち高知県民をおいてほかにありません。今日から私たちは今一度、全県民あげて世界に向けて思いを一つに、カツオという重要な資源を守り、産業や雇用、文化を次世代に継承していく取り組みを進めていかなければなりません。

カツオが捕れなくなった。そういったことが言われておりますけれども、むしろこれはカツオからのメッセージかも知れません。あんまり捕りすぎたら、わしらおらんなるぜよと。そういうふうなメッセージかも知れません。カツオをなくすわけにはいかないというふうに思います。

私たちは、カツオの身を食べて、これはうまいと喜んでいるわけですが、今一度カツオの身になって資源をどう守るかということを考えていかなければならない。そのように思います。

それからもう一つは、岡内さんから話が出ましたように、カツオは年中泳ぎ回っております。私たちも休むことなく、寝ることなく……。最近の働き方改革にちょっと違反をしますけれども、それぐらい泳ぎ回ってこの運動に正力力を入れていかないと、これはなかなか難しい問題ではないか、そのように思っております。そうしないとカツオに失礼ではないでしょうか。

結びといたしまして、本シンポジウムの盛会にあたり、ますます気運が高まりますことをご祈念申し上げて挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

○司会

青木章泰副会長のご挨拶でございました。

これをもちまして「高知カツオ県民会議 第1回シンポジウム」を終了させていただきます。皆様、長時間お付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。